

山梨県笛吹市

下新兵衛屋敷跡遺跡

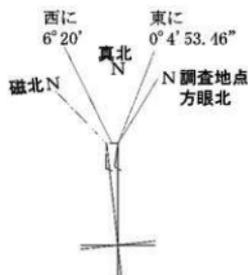
—ガソリンスタンド建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012

笛吹農業協同組合
笛吹市教育委員会
昭和測量株式会社

例 言

1. 本書は、山梨県笛吹市八代町南874-1・867-5番地に所在する下新兵衛屋敷跡遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査はガソリンスタンド建設に伴う事前調査として、事業者の笛吹農業協同組合より昭和測量株式会社が委託を受け、笛吹市教育委員会指導のもと平成22年9月27日から平成22年10月22日にかけて実施した。
3. 室内整理・報告書作成作業は平成23年5月16日から平成24年3月30日にかけて実施した。
4. 本報告書の執筆・編集は昭和測量株式会社が行った。以下に執筆分担を記す。
高野高潔：第1章・第3章（遺構文章）・第5章第2節、泉 英樹：第2章・第3章（遺物文章）、小谷亮二：第5章第1節。第4章の古人骨分析は澤田純明氏（聖マリアンナ医科大学解剖学講座）に委託した原稿を掲載した。
5. 各挿図の縮尺は以下とした。また、挿図中の尺度にも縮尺を付記した。
遺構：遺跡位置図1/50,000、周辺遺跡分布図1/10,000、調査区全体図1/80、
竪穴建物1/40、土坑1/20・1/40
遺物：土師器・須恵器・灰釉陶器1/4、石製品（勾玉）3/4、古銭3/4
遺物実測図の土器類は断面白抜き□が土師器、断面黒塗り■が須恵器、断面水玉□が灰釉陶器を表している。土師器の灰色範囲□は赤彩範囲□を表している。
6. 第1図および第2図は、国土地理院発行（平成14年6月1日発行）の数値地図25000（地図画像）「甲府」所収「甲府」「石和」を使用して作成した。
7. 遺構断面図の高さ表記は標高を表している。平面図の方位記号が示す北は方眼北を示している。第3章に記した遺構事実記載中の軸線方向は方眼北を基準（0°）とし東西への傾きを測定した値で示した。方眼北とは公共測量等で用いられており、都市計画図等で使用されている。方眼北は平面直角座標の座標値がX=0となる地点では真北と重なるが、その他の地点では真北と完全には一致せずずれが生じる。調査区のグリッド設定の起点としたX=-42435、Y=12680（平面直角座標系8系）地点では真北に対し僅かに東に0度4分53.46秒傾いている。また磁北も真北とは異なり、そのずれは場所、時代により変化する。現在の基準ではこの地点の磁北は真北に対して西に6度20分（2010年1月1日0時（LT））傾いている。
8. 発掘調査の成果品である図面・写真等の諸記録及び出土遺物は、笛吹市教育委員会が保管している。



目 次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1章 調査経緯と方法 | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 1 |
| 第3節 調査経過と方法 | 2 |
| 第2章 遺跡の環境 | |
| 第1節 位置と地理的環境 | 4 |
| 第2節 歴史的環境 | 4 |
| 第3章 調査の結果 | |
| 第1節 概要 | 6 |
| 第2節 堅穴建物 | 8 |
| 第3節 土坑 | 17 |
| 第4節 下新兵衛屋敷跡遺跡から出土した中世人骨 | 21 |
| 第5節 遺構外出土遺物 | 25 |
| 遺物観察表 | 28 |
| 第4章 まとめ | |
| 第1節 下新兵衛屋敷跡 | 31 |
| 第2節 遺構遺物の検討 | 33 |

挿 図 目 次

| | | | |
|--------------------|----|-----------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 5 | 第8図 2号堅穴建物遺物実測図 | 16 |
| 第2図 周辺遺跡分布図 | 5 | 第9図 1号土坑 | 18 |
| 第3図 調査区全体図 | 7 | 第10図 2号土坑 | 19 |
| 第4図 1号堅穴建物 | 8 | 第11図 2号土坑遺物実測図 | 20 |
| 第5図 1号堅穴建物遺物実測図(1) | 11 | 第12図 遺物出土記録地点 | 25 |
| 第6図 1号堅穴建物遺物実測図(2) | 12 | 第13図 遺構外遺物実測図 | 26 |
| 第7図 2号堅穴建物 | 15 | | |

写真図版目次

| | | | |
|--------------------|-------|-----------------|-------|
| 写真1~8 調査経過 | 3 | 写真31 2号堅穴建物出土遺物 | 17 |
| 写真9~11 調査区全景 | 6~7 | 写真32~34 1号土坑 | 18 |
| 写真12~23 1号堅穴建物 | 9~10 | 写真35~38 2号土坑 | 20 |
| 写真24~26 1号堅穴建物出土遺物 | 12~14 | 写真39 2号土坑出土遺物 | 20 |
| 写真27~30 2号堅穴建物 | 16 | 写真40~41 遺構外出土遺物 | 26~27 |

第3章第4節 挿図・表・写真図版目次

| | | | |
|--------------|----|---------------|----|
| 図1 出土人骨の残存部 | 21 | 表2 形態小変異の出現状況 | 22 |
| 表1 頭骨の計測値と示数 | 22 | 写真 出土人骨写真 | 24 |

第1章 調査経緯と方法

第1節 調査に至る経緯

下新兵衛屋敷跡遺跡の発掘調査は山梨県笛吹市八代町南874-1、867-5番地において笛吹農業協同組合（以下「笛吹農協」と表記）が行うガソリンスタンド建設事業に伴い実施された。事業対象地（1,579.87㎡）は以前に笛吹農協が畑地であった土地に建設した駐車場である。この駐車場建設の時点で笛吹市教育委員会（以下「笛吹市教委」と表記）は平成19年2月26日から3月2日に対象地の試掘確認を行っている。試掘確認はトレンチを5箇所設定し行われた。5箇所のトレンチを合計した調査面積は80.54㎡である。試掘確認の結果、2箇所のトレンチでそれぞれ地表下70cmと80cmの深さに遺物包含層が存在することが確認された。包含層から出土した遺物の中には完形に近い須恵器平瓶も含まれていた。駐車場建設の最大掘削深度10cmという建設計画と試掘確認の結果を受けて、笛吹市教委は駐車場建設が遺跡には影響を及ぼさないと判断し、これに伴う本調査は実施されなかった。

平成22年に笛吹農協はこの駐車場にガソリンスタンド建設を計画し、平成22年8月4日に山梨県教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定に基づく届け出を行った。これに伴い「土木工事等予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について」の詳細な協議が笛吹農協と笛吹市教委との間で行なわれた。協議の結果、建設計画において掘削深度を4mとする地下タンク埋設範囲について、発掘調査の実施を検討することとなった。前述の通り事業対象地には遺物包含層が存在することが判明していたが、地下タンク埋設範囲が77㎡（長さ11m、幅7m）と狭小であり、また平成19年に笛吹市教委が行った試掘確認トレンチと重複しない位置に計画されたために、この計画範囲に遺物包含層が存在し本調査の実施が必要であるかを判断することができなかった。このため笛吹市教委は平成22年9月3日に試掘確認を行った。試掘確認トレンチは長さ7m、幅1mである。試掘確認の結果、遺物包含層が確認され、山梨県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知を受けて発掘調査を実施することとなった。

本調査に際しては、平成22年9月24日に笛吹農協と昭和測量株式会社（以下「昭和測量」と表記）との間で、下新兵衛屋敷跡遺跡埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約を締結した。また、笛吹農協、笛吹市教委、昭和測量の三者間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結した。昭和測量は山梨県教育委員会へ文化財保護法第92条第1項に基づく届出を行い、笛吹市教委の指導監督のもと平成22年9月27日から発掘調査を開始した。発掘調査は77㎡を調査し、平成22年10月22日に調査を終了した。整理作業及び調査報告書の作成・刊行については、平成23年5月13日に笛吹農協と昭和測量との間で、下新兵衛屋敷跡遺跡埋蔵文化財発掘調査整理業務の委託契約を締結した。また、笛吹農協、笛吹市教委、昭和測量の三者間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結した。

第2節 調査体制

発掘調査は笛吹市教委の指導のもと昭和測量が実施した。整理作業は昭和測量文化財調査課（笛吹市石和町市部）において行った。以下に担当者名を記す。（五十音順、敬称略）
発掘調査 現場担当者：高野高潔
測量（基準点）担当者：飯塚基
発掘調査参加者：新谷和美、大森透江、小島健治、小林としみ、原田隆邦、望月明、山田忠

整理作業担当者：泉英樹、小谷亮二、高野高潔

整理作業参加者：山田忠

なお、表土掘削・発生土埋め戻し時の建設機械の操作・運転は池谷建材店が行った。出土古人体分析は聖マリアンナ医科大学解剖学講座 澤田純明氏に依頼した。出土遺物の金属保存処理は埋蔵文化財の保存処理いしかわに委託した。

第3節 調査経過と方法（写真1～8）

発掘調査は平成21年9月27日から10月22日まで実施した。以下に調査経過と方法を順に記す。

9月27日：安全柵設置、建設機械（バックホー0.4m³）を用いての表土掘削。掘削による発生土は調査区に隣接して事業地内に仮置きした。

9月29日：人力による精査を開始。

9月30日：基準点測量、グリッド設定。GPS測量により4級基準点測量を行なった（世界測地系）。グリッドは調査区の北東部にあたるX=-42435、Y=12680（平面直角座標系8系）を起点として5m方眼を設定した。グリッド名称は北から南へアルファベット、東から西へ数字を列して「A1グリッド」のように呼称した。

遺構・遺物の検出・掘削は、移植機・小型ツルハシ等を用いて行なった。遺構掘削による発生土は、輪車で運搬・仮置きした。

検出した遺構・遺物は順に名称を付し、写真撮影、実測、測量等により適宜記録を実施した。遺構名称の略号は堅穴建物SI、土坑SKとした（表記例：1号堅穴建物SI-1）。

遺構の位置、形状、土層断面などはトータルステーションと手実測、写実実測を併用して記録した。包含層及び遺構で検出された遺物は順に番号を付して、トータルステーションを使用して位置を記録した。小破片については各遺構又はグリッドの一括出土遺物として取り上げた。遺構・遺物の写真撮影は一眼レフデジタルカメラを使用した。測量・写真撮影に使用した器材は以下の通りである。

トータルステーション：Nikon-Trimble FALDY-EN3、編集ソフトウェア：CADiOs+。
GPS測量 受信機：トリブ #4000SE、アンテナ：Compact Dome、解析ソフトウェア：TRIMBLE NAVIGATION、LTD WAVE VERSION 2.35。

カメラ（レンズ）：Nikon D50（AF-S DX Zoom-Nikkor ED 18～55mm F3.5-5.6G）。
編集ソフトウェア：Photoshop Ver. 6.0（ADOBE）、Illustrator Ver. 10.0（ADOBE）、DxO Optics Pro v6.1.2Win（DxO Labs）。

また、土色表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修2004『新版標準土色帖』（26版）に基づき記録した。

10月22日：上記建設機械を用いての調査区埋め戻し。安全柵撤去。現場終了。

整理作業および報告書作成は平成23年5月16日から平成24年3月30日まで実施した。出土遺物への注記は「シモシンベエSI-1 No1 101004」「シモシンベエA1一括101007」のように、遺跡名称略称、遺構・グリッド略号、遺物番号、出土年月日の順に記した。遺物の接合は水性木工用ボンドを使用して行なった。

遺物実測は手測りで行った。実測図のトレースはデジタルトレースをした。遺物の撮影は一眼レフデジタルカメラを使用した。各デジタルデータを使用して挿図・写真図版を作成し、報告書原稿を編集した。報告書原稿作成に使用した器材は以下の通りである。

ソフトウェア：Photoshop Ver. 6.0（ADOBE）、Illustrator Ver. 10.0・Ver. CS4（ADOBE）。
撮影カメラ（レンズ）：Nikon D90（AF-S DX Nikkor 18-105mm F3.5-5.6G ED VR）。



1. 調査前風景（北西から）



2. 表土掘削風景（南西から）



3. 調査風景：調査区全景（西から）



4. 調査風景：作業風景（北から）



5. 埋め戻し風景：掘削土埋め戻し（北から）



6. 埋め戻し風景：碎石敷き・整地（東から）



7. 調査終了後開発状況（北西から）



8. 調査終了後開発状況（南東から）

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境(第1図)

下新兵衛屋敷跡遺跡は山梨県笛吹市八代町南に所在する。甲府盆地の南東部に位置し、南には御坂山地が連なり、北西には笛吹川が流れる。笛吹川は甲府盆地の中央を西行して釜無川と合流し、富上川となって太平洋に注ぐ。笛吹川に向かっては金川・天川・浅川・境川などが御坂山地から注ぎ、これらの河川が扇状地を形成している。調査地は、浅川によって形成された浅川扇状地の扇央部に位置する。浅川は御坂山地の中央部に源流をもつ全長約12kmの河川で、浅川扇状地は、甲府盆地に広がる扇状地群の中でも最も発達したものの一つである。かつての浅川は洪水のたびに流路を自由に変えて流れ、多量の土砂を運搬してきた。扇央部にあたる遺跡周辺は、その堆積が厚く盛り上がり、現在の浅川の流路は扇状地の西端に片寄っている。

調査地は、北西へ向かって緩やかに下る傾斜地となっており、標高292mを測る。北西約700mには中央自動車道が走っている。東に笛吹市役所八代支所が隣接し、南東約200mには笛吹農業協同組合(J A ふえふき)本所が所在する。

第2節 歴史的環境(第2図)

浅川扇状地一帯は、縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が濃厚に分布する遺跡集中地帯であり、調査地のごく近隣にも数多くの遺跡の存在が知られている。

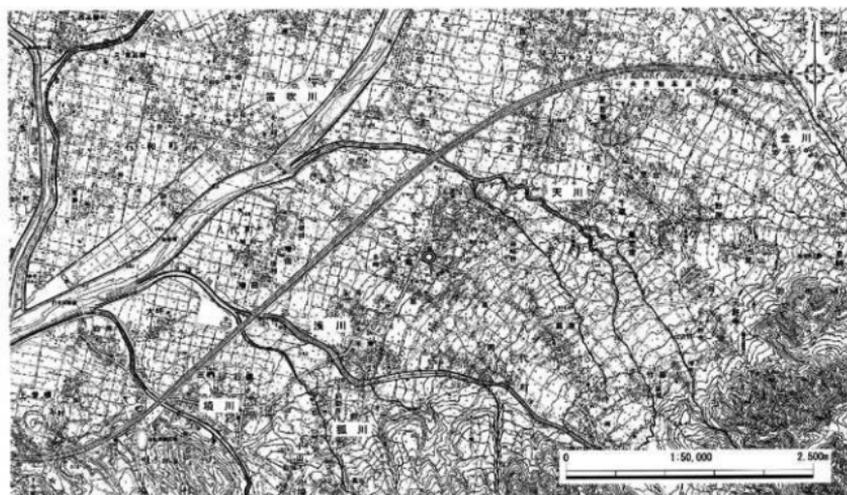
縄文時代では、堀ノ内遺跡(15)、金地蔵遺跡(21)、下長崎遺跡(26)で遺構が確認されている。調査地を囲むように隣接している堀ノ内遺跡では、中期後葉の土壌1基と埴甕1基が確認され、周辺に当該時期の集落が存在していた可能性が指摘されている。

弥生時代では、身洗沢遺跡(1)があり、後期の住居跡2軒と水田跡が確認されている。

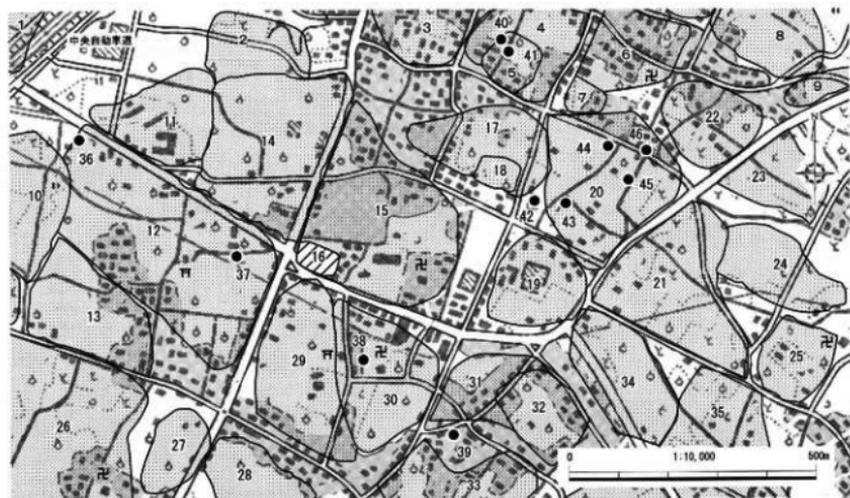
古墳時代では、調査地の西に隣接する五里原遺跡(12)の平成16年度調査において、8軒の住居跡が確認され、県内2例目となった子持勾玉なども出土している。堀ノ内遺跡においても16軒の住居跡がみつかり、特に後期以降は、調査地周辺で顕著な集落の広がりがあったと考えられる。また、古墳が数多く所在しており、調査地の北西に弁財天塚古墳(36)、西に鎧塚古墳(37)、南に二子塚古墳(38)、北東には能成寺塚古墳(40)・信守塚古墳(41)・伊勢塚古墳(43)・団栗塚古墳(44)・真根子塚古墳(45)などがある。原形をとどめておらず詳細が不明な古墳も多いが、団栗塚古墳は、内部が朱塗りの堅穴式石室が2室並置された古墳である。鉄鍬や鉄剣の他、山梨県より文化財指定を受けた銅鏡などが出土しており、5世紀後半に位置付けられている。真根子塚古墳では、墳丘は削平されていたものの周溝が検出され、直径約12mの円墳であることや、その出土遺物から5世紀後半の築造であることが推定されている。

奈良・平安時代では、下長崎遺跡・五里原遺跡・堀ノ内遺跡・八王子遺跡(19)などがある。五里原遺跡の平成16年度調査では、奈良・平安時代の住居跡も6軒見つかかり、堀ノ内遺跡からも20軒が確認されている。これらの調査からは、古墳時代後期以降、調査地周辺に広がりを見せた集落が、奈良・平安時代に至るまでの長期間にわたって断続的に継続していた様子がみとれる。10世紀前半編纂の『和名類聚抄』には八代郡と長江・白井・沼尾・河合・八代の5郷についての記載があり、この中の八代郷は調査地周辺に比定されている。

中・近世では、小山城跡・武田信成館跡・奴白屋敷跡(7)・飯田氏屋敷跡(18)、そして下新兵衛屋敷跡(16)などの城跡や城館跡があり、調査地周辺は戦国時代以前の守護武田氏の根拠地の一つとなっていた時期があったようである。また、身洗沢遺跡では掘立建物跡13棟などの遺構も確認されている。



第1図 遺跡位置図



- | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 身洗沢 | 2. 神田 | 3. 大庭 | 4. 飯白 | 5. 船成寺跡 | 6. 上小下 | 7. 飯白屋敷跡 |
| 8. 大橋遺跡 | 9. 川俣塚 | 10. 弁文天 | 11. 真瀨澤 | 12. 五里澤 | 13. 長崎 | 14. 塚ノ下 |
| 15. 堀ノ内 | 16. 下新兵器庫敷跡 | 17. 竹之内 | 18. 飯田氏屋敷跡 | 19. 八王子 | 20. 伊勢之宮 | 21. 金地藏 |
| 22. 久保A | 23. 久保B | 24. 堀川 | 25. 御崎林 | 26. 下長崎 | 27. 富之後 | 28. 向原 |
| 29. 原 | 30. 二子塚 | 31. 森の上北 | 32. 浪人屋敷跡 | 33. 森の上南 | 34. 下神之本 | 35. 上神之本 |
| 36. 弁財天塚古墳 | 37. 籠塚古墳 | 38. 二子塚古墳 | 39. 地藏塚古墳 | 40. 船成寺塚古墳 | 41. 信守塚古墳 | 42. 無名古墳 |
| 43. 伊勢塚古墳 | 44. 田原塚古墳 | 45. 真根子塚古墳 | 46. 無名古墳 | | | |

第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の結果

第1節 概要（第3図、写真9～11）

調査地は浅川が形成した扇状地上に立地し、南東から北西へと下っている。発掘調査時の現況は笛吹農業協同組合の駐車場、それ以前は畑地であった。また、昭和8年には有限責任盛産信用購買販売生産組合（大正5年設立）の乾蒔場が建てられていたとされている。

調査区壁面で確認した調査区の堆積土層序では、1層が調査地現況の駐車場に敷かれている碎石、2層が盛土と攪乱であった。2層の盛土は駐車場建設時の転圧土層と思われるものも含め、複数の土層が確認できたが一括して2層とした。また2層の攪乱は3・4層に及んでおり、4層まで達した攪乱の中には柱の根石も検出された。この根石は上記の乾蒔場との関連性も考えられた。2層中にはビニール等と一緒に近世磁器が混入することが調査区壁面で確認された。3層以下は自然堆積土層と判断した。3層には摩耗した土師器小片を散見することができた。4層は多量に遺物を包含していた。このため重機を用いた掘削は4層上面を検出した時点で止め、4層（遺物包含層）は人力で精査を行った。5層と6層では遺構を検出した。5層は調査区南西側でのみ確認できた。5層上面では2号土坑（SK-2）を検出した。6層は大きなものでは50cm大の礫も含んでいる砂礫層である。6層上面では1・2号堅穴建物（SI-1・2）、1号土坑（SK-1）を検出した。3～6層は浅川の河川作用による堆積と考えられる。この他にも調査区北側では4層と6層の間、或いは6層中に黒色土が堆積する範囲があり、5層とともに河川の堆積作用による部分的な間層と考えられた。

1・2号堅穴建物（SI-1・2）、1号土坑（SK-1）はいずれも砂礫層（6層）を掘り込み形成されていた。2号土坑（SK-2）からは人骨と古銭が検出された。

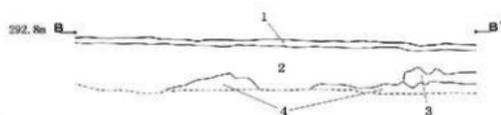
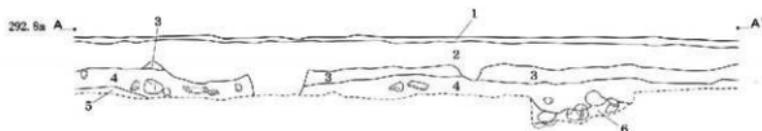
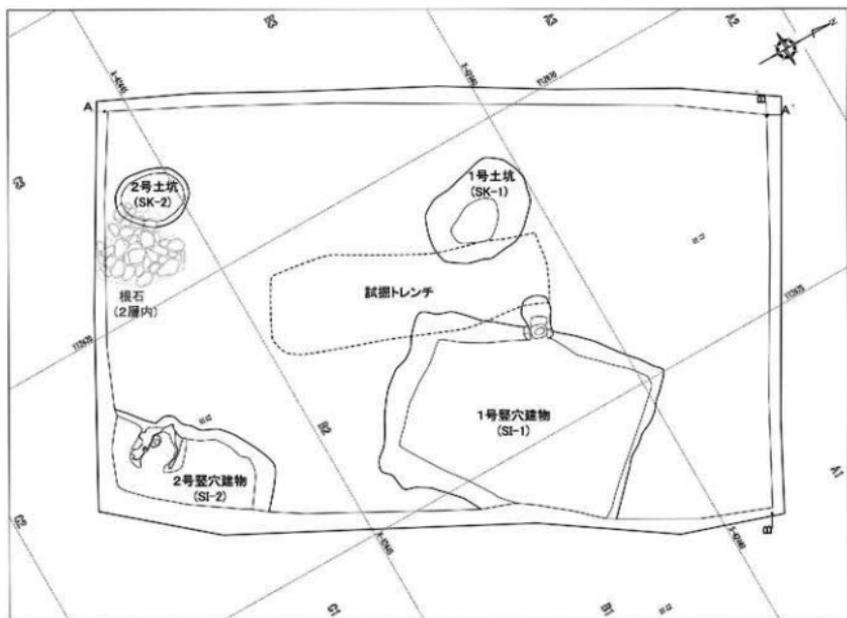
人骨を除いた発掘調査全体の出土遺物量は整理箱（容量33.6cm×54.5cm×20cm）に換算して4箱であった。この内、大半の遺物が基本層序4層からの出土である。4層からは土師器、須恵器、灰釉陶器、勾玉など古墳時代から平安時代までの遺物が混在していた。4層は扇状地の上方（南東側）から流れてきて遺物包含層として堆積したものと考えられる。このため、遺構外からも時代幅を持って多くの遺物が出土している。以下に各遺構を出土遺物とともに詳述する。



9. 基本層序2層根石検出状況（北東から）



10. 調査区全景（北から）

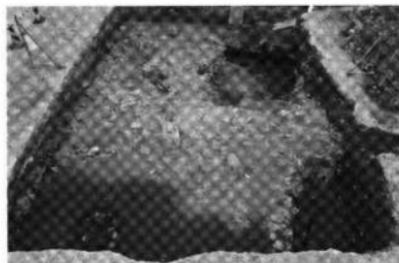


調査区 (基本層序)

1. 駐車場砂石
2. 盛土、覆土
3. 細かい黄褐色10YR4/3シルト。粘性弱、しまり強。2~3mm炭化粒2%、1~2cm重円礫5%を含む。
4. 暗褐色10YR3/3シルト。粘性弱、しまり強。2~5cm重円礫10%、20~30cm重円礫2%、1~5mm炭化粒1%、3mm粒砂粒5%を含む。
5. 褐色10YR4/5シルト。粘性弱、しまり強。1~2cm重円礫5%を含む。
6. 黄褐色2.5YR5/4砂礫。粘性なし、しまり弱。10~20cm重円礫30%、2~5cm重円礫20%、40~50cm重円礫10%を含む。



第3図 調査区全体図



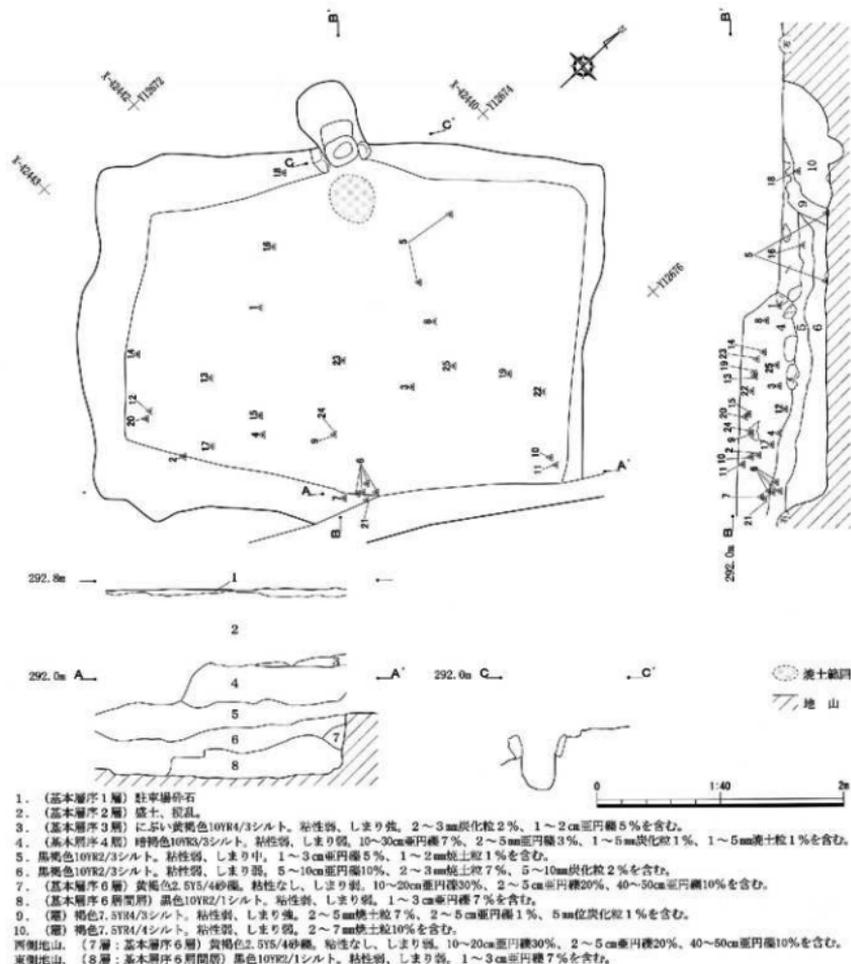
11. 調査区全景 (南西から)

第2節 竪穴建物

(1) 1号竪穴建物 (SI-1)

遺構：(第4図、写真12~23)

1号竪穴建物は調査区東部に位置し、A1・2、B1・2グリッドの4グリッドにまたがっている。基本層序6層(砂礫層)の上面で検出をした。6層(砂礫層)を掘り込み形成されている。覆土の最上層の上には基本層序4層(遺物包含層)があり、壁面は東側が6層(砂礫層)と6層の間層、西側が6層(砂礫層)である。床面は東側が6層の間層、



第4図 1号竪穴建物 (SI-1)

西側が6層(砂礫層)である。竪穴建物のほぼ全体を検出したが建物の東側角部分は調査区外である。検出できた範囲では他の遺構との切り合い関係は無い。建物の規模は検出範囲で長軸4.1m、短軸3.0m、壁高36~50cm、面積11.7㎡。平面形は長方形である。竈を基準とした軸線方向はN-45°-Wである。

壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。周溝、硬化面、貼床面は検出していない。

竈は北西側の壁中央に配置されている。竈の袖部はほとんど失われ、袖部構築材の縦長の石のみが建物壁面に接して立位で残っていた。竈の火床部は弱い焼土範囲(長径42cm、短径36cm、円形)を検出した。火床部の奥には支柱石ビット(長径27cm、短径22cm、深さ29cm)を検出した。煙道部では焼土範囲は検出していない。火床部の位置などから想定した竈の規模は幅70cm、奥行き1.2m(煙道部50cmを含む)位である。

建物床面では土坑、ビットは検出していない。

遺物の出土状況は平面的には偏りは認められないが、断面では4層(基本層序4層と同一)に多くの遺物が集中しており、床面直上から出土した遺物はわずかであった。建物中央部からは勾玉(遺物No.25)が出土しているが層位的に判断すると他所からの流れ込みと考えられた。また、4層中からは灰矽陶器(遺物No.24)の中に土師器(遺物No.9)が重なって出土した。割れて胴部下半から底部のみとなった灰矽陶器壺の中に完形の坏がはまり込み、逆さになった状態で出土している。出土状況等から人為的に重ねたのではなく、遺物包含層の堆積過程で割れた壺の中に偶発的に坏が入り、逆さまの状態の流れ止まったものと判断した。



12. 1号竪穴建物検出状況(北西から)



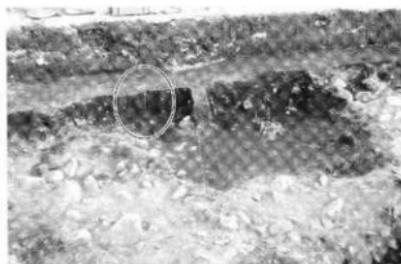
13. 1号竪穴建物覆土堆積状況(南西から)



14. 1号竪穴建物完掘状況(東から)



15. 1号竪穴建物竈完掘状況(南東から)



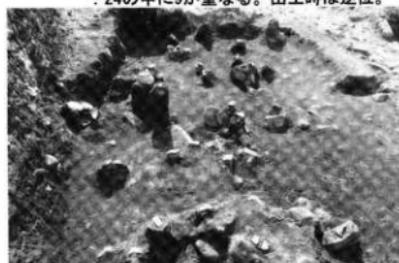
16. 1号竪穴建物勾玉 (遺物No.25) 出土状況
: ピンポール根元 (北西から)



17. 1号竪穴建物遺物出土状況 (遺物No.9・24)
: 24の中に9が重なる。出土時は逆位。



18. 1号竪穴建物遺物出土状況 : 上層 (南東から)



19. 1号竪穴建物遺物出土状況 : 上層 (北東から)



20. 1号竪穴建物遺物出土状況
: 上層竈前 (南東から)



21. 1号竪穴建物遺物出土状況 : 下層 (北東から)



22. 1号竪穴建物遺物出土状況
: 下層竈前 (南東から)



23. 1号竪穴建物竈支柱石ビット半截状況
(北東から)

遺物：（第5・6図、写真24～26）

図示できた出土遺物は土師器20点、須恵器3点、灰釉陶器1点、勾玉1点である。

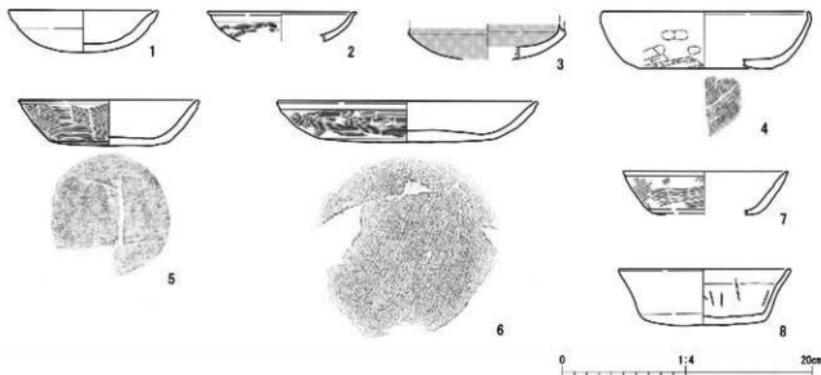
1～10は土師器の坏である。1は丸底の坏で、口縁部の横ナデ調整によって、ゆるい稜をもつ。2は口縁部が横ナデされ、端部は外反する。体部は内外面ヘラミガキする。3は体部破片で、口縁部と体部の境に稜をもつ。内外面に密なヘラミガキを施し、赤彩する。4～8は盤状の坏または皿である。4は口縁端部がやや内湾し、体部中位に指頭圧痕がみられる。体部下位はヘラケズリし、底部に木葉痕が残る。5～7は口縁端部に稜をもち、外面は底面に至るまで全面にハケ調整を施すものである。8はロクロナデした後、内外面に細かいヘラミガキを施す。内面には放射状の細い線刻がみられ、底部はヘラケズリする。9・10はロクロナデし、体部下半をヘラケズリする甲斐型土師器の坏である。胎土には赤褐色粒子を含み、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内面に暗文は施されていない。9は24の中につきぼりと収まった状態で出土している。11は土師器の羽釜である。口縁部から銜部にかけての破片である。内外面ハケ調整を施し、銜部はやや下方に向く。12～20は土師器の甕である。12は「く」の字口縁のやや小型の甕で体部外面はハケ調整を施す。13・14は短く外方に屈曲する口縁部の破片である。13は内面に、14は内外面ともハケ調整を施す。15は口縁部破片で「く」の字状を呈する。16は体部である。球胴形を呈し、内面に横方向、外面に縦方向のハケ調整を施す。17～20は底部で、木葉痕を残すものである。

21～23は須恵器である。21は擬宝珠状のつまみを持つ坏蓋で、外面に自然釉がかかる。22は高台付の坏で、底部には回転ヘラ切り痕が残る。23は高坏か。扁平な坏部をもつとみられる。

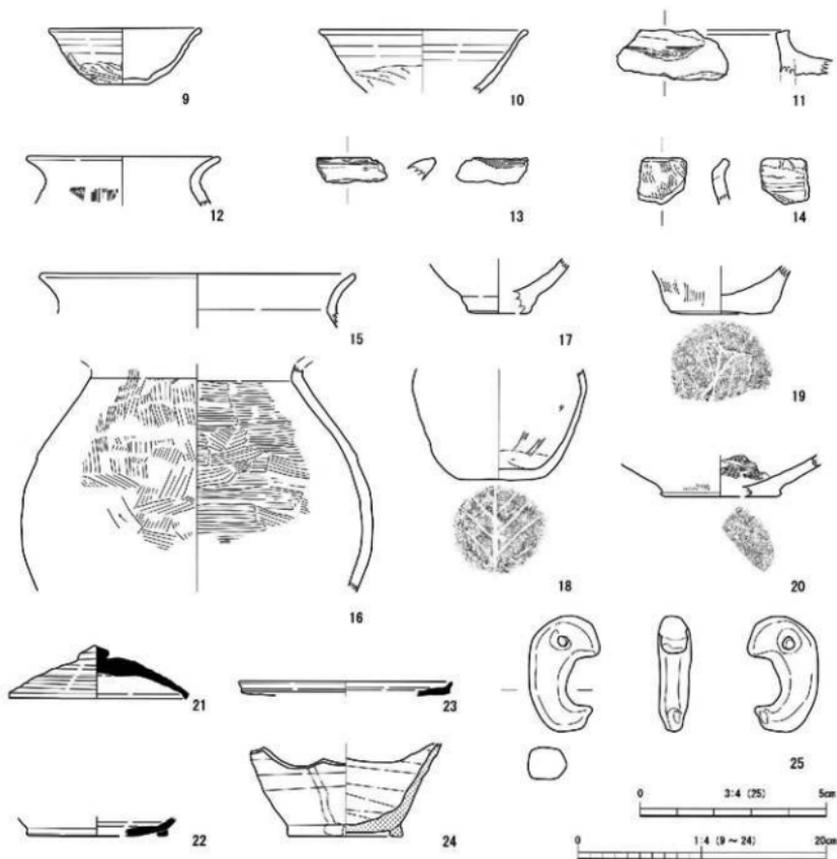
24は灰釉陶器の壺である。外面全体に釉がかかり、底部はヘラ切りし高台を貼り付ける。9と重なって出土している。

25は勾玉で、石材は滑石である。形状はコの字状で不透明なオリーブ灰色を呈する。孔の観察から両面穿孔とみられる。

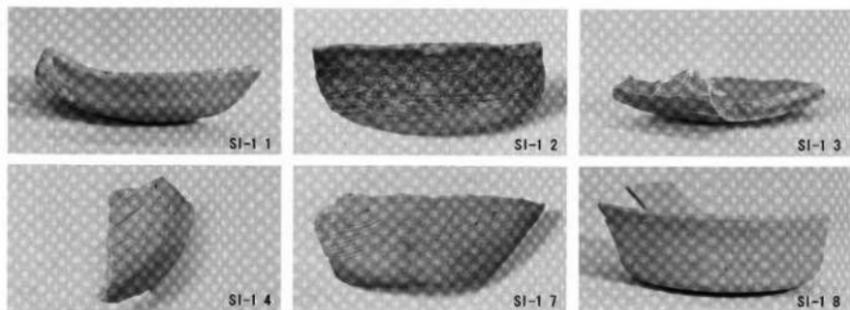
1号竪穴住居跡の出土遺物は、大きく分けると古墳時代後期、奈良時代（8世紀前半）、平安時代（10世紀前半）の3時期のものがみられる。1～3は古墳時代後期、4～8と21～23は奈良時代のものともみられ、4～8は8世紀前半か。9～11・24は10世紀前半の所産とみられる。



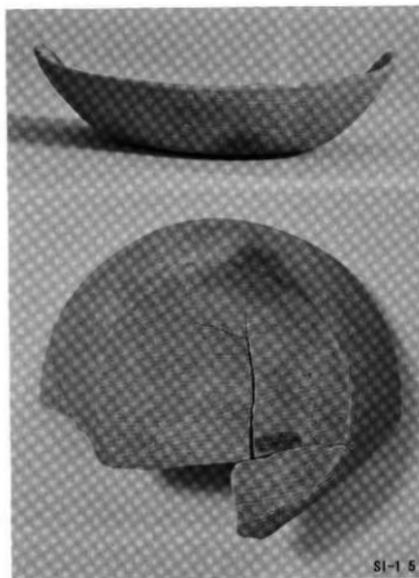
第5図 1号竪穴建物(SI-1)遺物実測図(1)



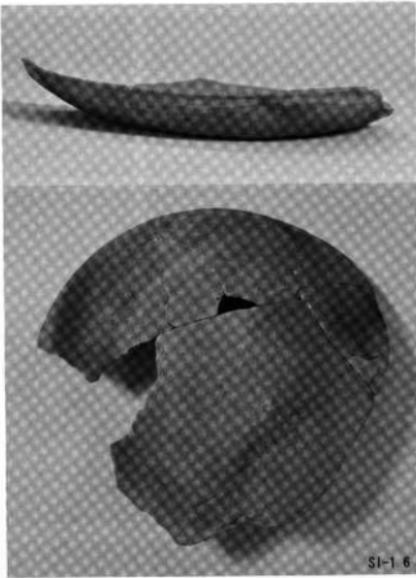
第6図 1号竖穴建物(SI-1)遺物実測図(2)



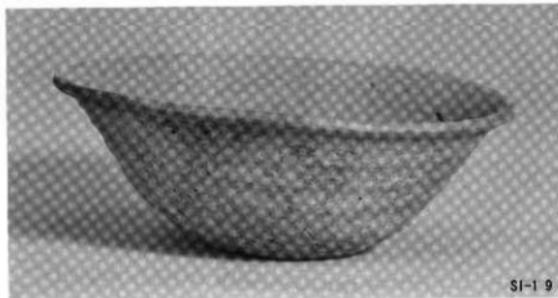
24. 1号竖穴建物(SI-1)出土遺物(1)



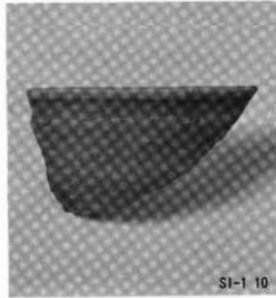
SI-1 5



SI-1 6



SI-1 9



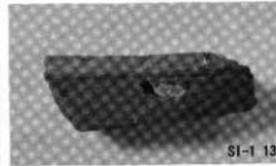
SI-1 10



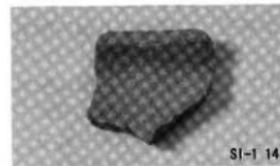
SI-1 11



SI-1 12



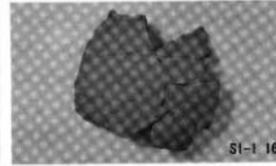
SI-1 13



SI-1 14

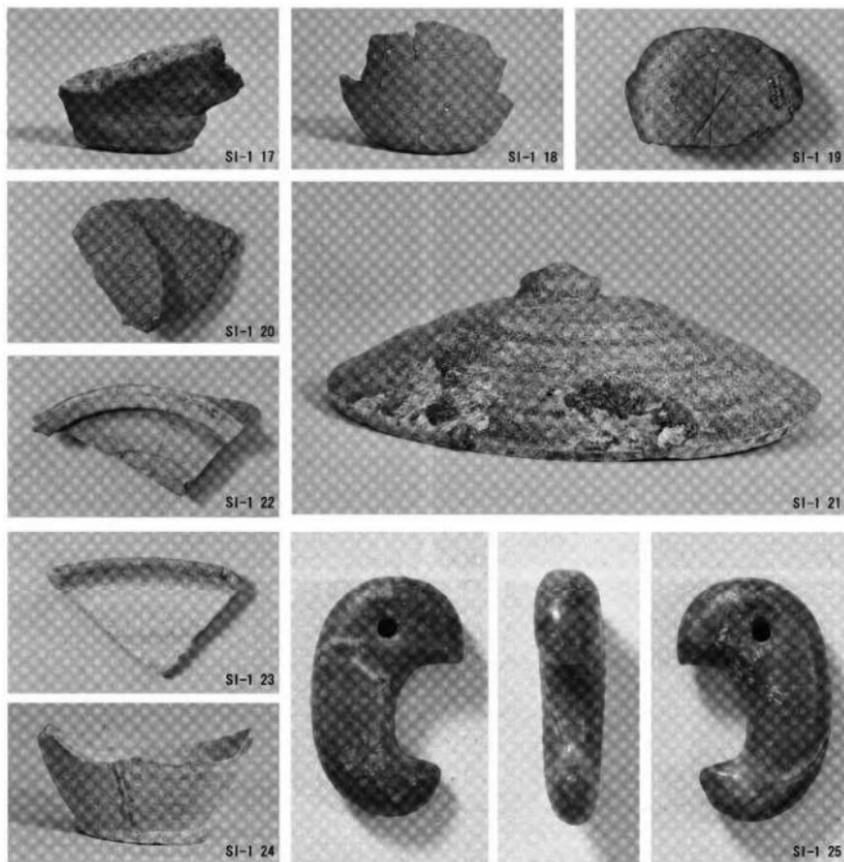


SI-1 15



SI-1 16

25. 1号竖穴建物 (SI-1) 出土遺物 (2)



26. 1号堅穴建物 (SI-1) 出土遺物 (3)

(2) 2号堅穴建物 (SI-2)

遺構：(第7図、写真27~30)

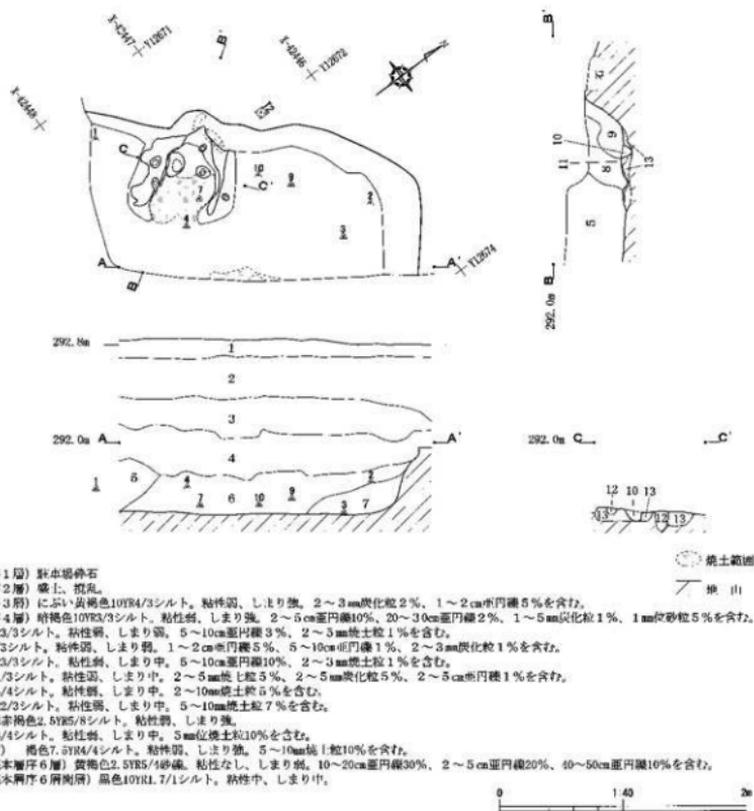
2号堅穴建物は調査区南部のC2グリッドに位置する。基本層序6層(砂礫層)の上で検出をした。6層(砂礫層)を掘り込み形成されており、覆土の最上層は基本層序4層(遺物包含層)、壁面は6層(砂礫層)、床面の北側は6層(砂礫層)、南側は6層の間層である。建物の北側角から竈にかけてのみ検出した。建物の大半は調査区外へ続いていると考えられる。検出できた範囲では他の遺構との切り合い関係は無い。建物の規模は検出範囲で長軸2.9m、短軸1.2m、壁高32~54cm、面積3.1㎡。検出範囲が部分的ではあるが、平面形は方形ではあると想定される。竈を基準とした軸線方向もN-45°-Wと想定される。

壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦である。周溝、硬化面、貼床面は検出していない。

竈は北西側の壁に配置されている。壁の中央か或いは偏りがあるのかは判断できない。竈の袖部は裾部のみ僅かな起伏として検出した。袖部の掘り方では構築材である石材を立てたと考えられるピットを検出した。竈の火床部は強い焼土範囲（長径17cm、短径38cm、不整形、焼土厚さ1～5cm）を検出した。火床部の奥には支柱石ピット（長径21cm、短径15cm、深さ8cm）を検出した。煙道部では一部に焼土範囲が認められた。竈の規模は幅84cm、奥行き1m（煙道部27cmを含む）である。

建物床面では竈の斜め前方で焼土範囲を検出した。焼土範囲は調査区外へと続いていた。土坑、ピットは検出していない。

遺物の出土状況は平面的には偏りは認められない。断面では6層に遺物が集中するように見えるが、4層（基本層序4層と同一）出土遺物の多くを遺構外として取り上げたためである。4層出土遺物と4層以下の層から出土した遺物の量を比較すると1号竪穴建物と同様に多くの遺物が4層から出土しているという傾向が見える。床面直上から出土した遺物はわずかであった。



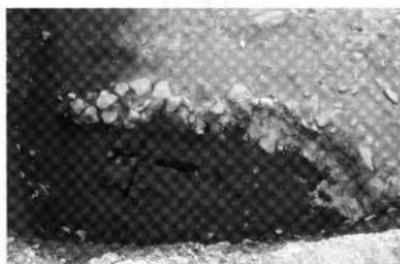
第7図 2号竪穴建物(SI-2)



27. 2号竖穴建物検出状況（北東から）



28. 2号竖穴建物覆土堆積状況（南西から）



29. 2号竖穴建物完掘状況（南東から）

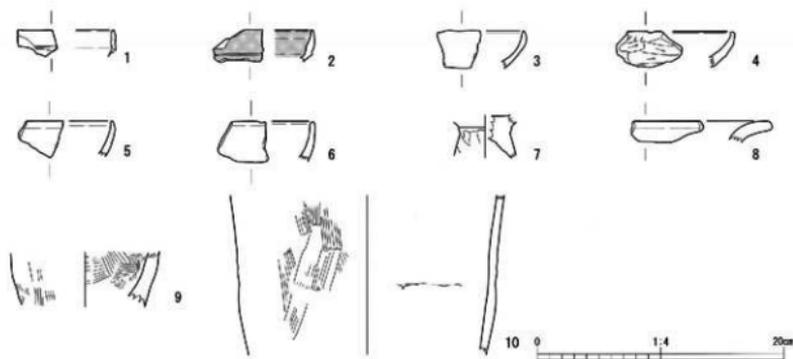


30. 2号竖穴建物完掘状況（南西から）

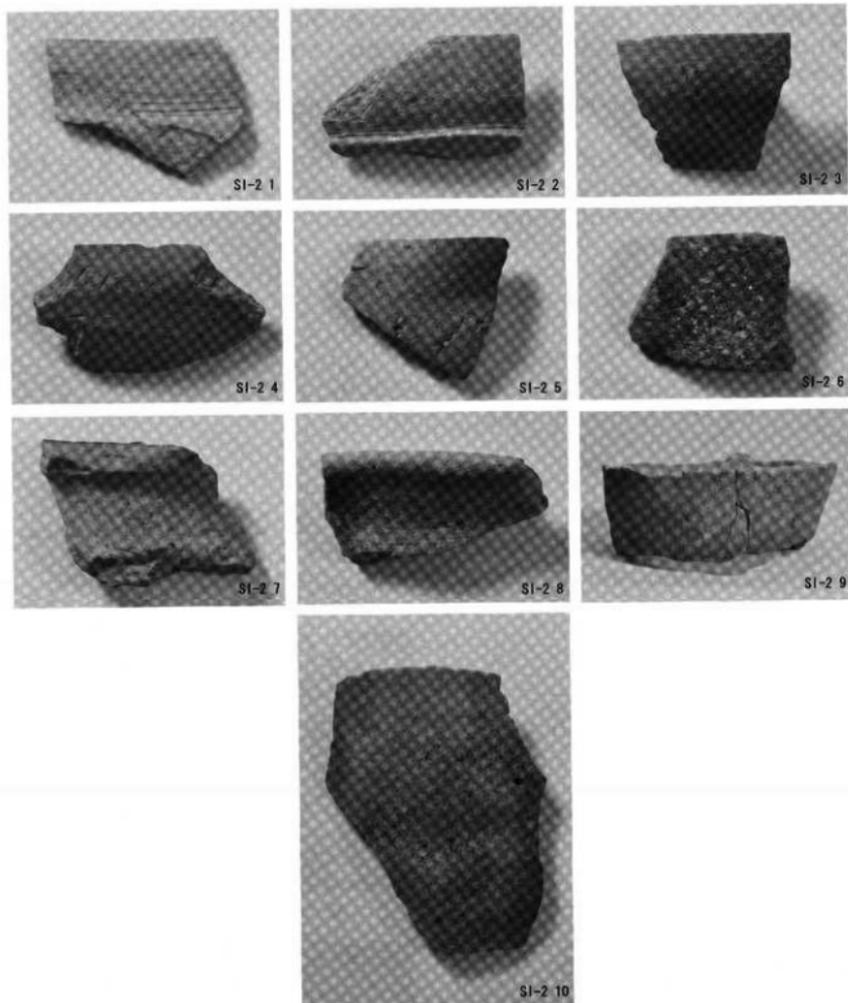
遺物：（第8図、写真31）

図示できた出土遺物は土師器10点である。1～6は土師器坏の口縁部破片である。1・2は口縁部と体部の境に段を持ち、2は内外面に赤彩を施す。3の口縁はやや内湾し、4は体部をヘラケズリする。7は土師器高坏で裾部が「ハ」の字状に開く脚部をもつとみられる。外面はヘラケズリする。8～10は土師器の甕である。8は外反する口縁の破片である。9・10は体部破片で、9は内外面に、10は外面にハケ調整を施す。

2号竖穴住居跡の出土遺物は、古墳時代後期を主体とするとみられるが、覆土から出土したものがほとんどであり、出土量も少ない。



第8図 2号竖穴建物 (SI-2) 遺物実測図



31. 2号竪穴建物 (SI-2) 出土遺物

第3節 土坑

(1) 1号土坑 (SK-1)

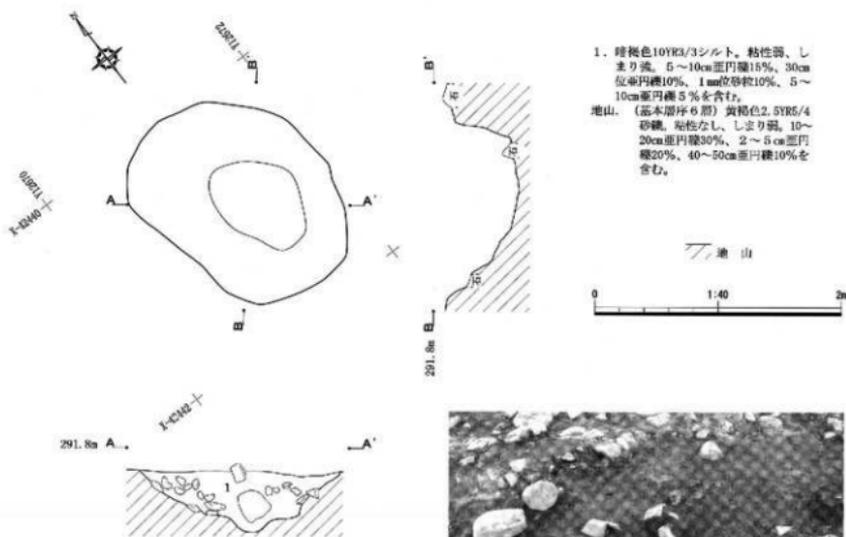
遺構：(第9図、写真32~34)

1号土坑は調査区中央部のB2グリッドに位置する。基本層序6層(砂礫層)の上面で検出をした。6層(砂礫層)を掘り込み形成されており、覆土は単層で、壁面・床面は6

層(砂礫層)である。土坑の全体を検出し、他の遺構との切り合い関係は無い。規模は長軸1.9m、短軸1.5m、深さ50cm、面積2.1㎡。平面形は不整形円形である。長軸を基準とした軸線方向はN-21°-Wである。

断面形も不整形であるが概ね底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。底面でピットは検出していない。

遺物は土師器破片を1点だけ検出したが、層的には確実に1号土坑覆土に属すると判断出来ないものであった。



第9図 1号土坑 (SK-1)



32. 1号土坑検出状況(西から)



33. 1号土坑覆土堆積状況(西から)



34. 1号土坑掘削状況(東から)

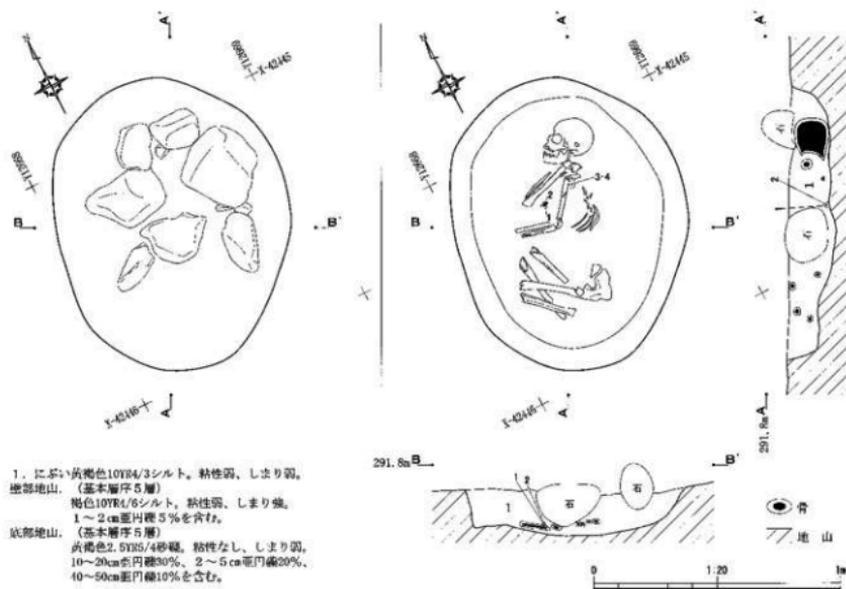
(2) 2号土坑 (SK-2)

遺構：(第10図、写真35~38)

2号土坑は土壌塚である。調査区南西部に位置し、B3、C3グリッドの2グリッドにまたがっている。基本層序5層の上面で検出をした。5層を掘り込み形成されており、覆土は単層で、壁面は5層・床面は基本層序6層(砂礫層)の上面である。土坑の全体を検出した。他の遺構との切り合い関係は無いが、上層では基本層序2層の根石の位置が2号土坑南東部分と一部重なっている。土坑の規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ19cm、面積0.9㎡。平面形は楕円形である。長軸を基準とした軸線方向はN-14°-Eである。底面は平埠で、立ち上がりは概ね急といえる。

土坑検出の時点で覆土の上面に20~30cm大の礫が7個寄せ集まるような状態にあることを確認した。覆土を掘り下げ始めるとすぐに礫の脇で骨を検出した。その後に礫の下を掘り下げて、扉葬で埋蔵された状態の人骨を検出した。頭部から腰へ方向を基準とした軸線方向はN-14°-Eで、土坑の軸線方向と一致している。顎が上がった状態にあるため、頭部のみで考えると軸線方向はN-45°-Eとなり、目線というとN-45°-Wといえる。地図上に当てはめると身体全体は北岳方面を向いていて、目線は諏訪湖方面に向けられている。人骨の状態は湿ったクッキーのように脆弱であった。このため、人骨取り上げ時はアクリル樹脂のパラロイドB-72を塗布して補強した後、周囲の上とともに取り上げを行った。

副葬品は古銭を4枚検出した。覆土掘り下げ時に懐に抱くような位置から2枚重なる状態で銭を検出した。銭の向きは立った状態であり、1枚は「永楽通宝」と確認した。その後人骨とともに取り上げた土塊の中から2枚の銭を検出した。出土状態は確認できていないが、およその出土位置は右腕の脇から胸元辺りであった。



第10図 2号土坑 (SK-2)



35. 2号土坑検出状況（南東から）



36. 2号土坑人骨検出風景（北東から）



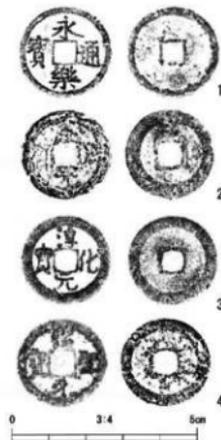
37. 2号土坑人骨検出状況（北西から）



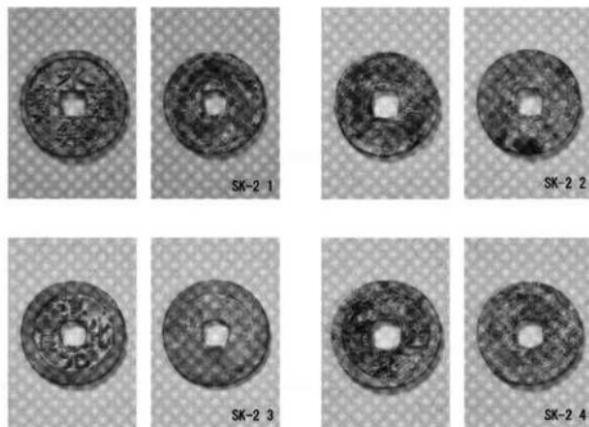
38. 2号土坑完掘状況（北西から）

遺物：（第11図、写真39）

2号土坑からは人骨が一体出土している。出土遺物は銅銭4点で、埋納銭と考えられるものである。1は「永楽通宝」、2は「〇〇元宝」、3は「淳化元宝」、4は「紹聖元宝」である。2は遺存状態が悪く判読できないが、いずれも渡来銭とみられる。埋納時期は、永楽通宝の初鑄造年から15世紀初頭を上限とする。



第11図 2号土坑（SK-2）
遺物実測図



39. 2号土坑（SK-2）出土遺物

第4節 下新兵衛屋敷跡遺跡から出土した中世人骨

澤田純明（聖マリアンナ医科大学 医学部 解剖学講座）
佐伯史子（日本人類学会会員）

下新兵衛屋敷跡遺跡の2010年発掘調査において、埋葬された中世人骨1体が出土した。以下、この人骨の人類学的所見を報告する。計測はMartinの方法（馬場，1991）にしたがった。

遺存状況

残存部位を図1に示す。骨の保存状態は概して不良である。風化・腐食による骨質の劣化が著しく、骨体がかきわめて脆弱であったため、骨に付着した土をできる限り除去してから、アセトンで希釈した化学接着剤（セメダインC）を骨の全面に塗布して補強措置を施した。

頭骨：顔面部の一部（前頭骨、右頬骨、上顎骨、下顎骨の右側の大半と左側の下顎体）と、脳頭蓋の大半が残存する。

歯：一部の切歯・犬歯と、ほぼ全ての小臼歯・大臼歯が残存する。歯式は下記の通りである。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|---|------|---|----|---|-----|----|----|----|----|----|
| M3 | M2 | M1 | P2 | P1 | C | (I2) | ○ | I1 | ● | C | P1 | P2 | M1 | M2 | M3 |
| M3 | M2 | M1 | P2 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (C) | P1 | P2 | M1 | M2 | M3 |

歯種記載：存在（括弧付きは遊離歯）、○：死後脱落、●：生前脱落

骨幹の骨：環椎、軸椎、第3・第4頸椎が認められる。環椎と軸椎はほぼ完形。他の頸椎は椎体と椎弓が部分的に残存する。

上肢の骨：右鎖骨の骨幹部、左肩甲骨の鳥口突起、左右上腕骨の骨幹部が残存する。右上腕骨は骨頭が保存されるが、他の長骨はいずれも骨端を欠損し、骨幹部表面の大部分が剥落している。橈骨および尺骨の骨幹部と思われる小片が残存するが、左右の特定は困難であった。

下肢の骨：左右の大腿骨と脛骨の骨幹部が残存するが、骨端は欠損している。脛骨は土圧による変形が著しい。寛骨と腓骨は残存していない。

その他、中手骨または中足骨の骨幹部、および部位を特定できない小片が数点認められた。

年齢の推定

上顎・下顎とも第3大臼歯の萌出が完了していることから20歳以上の成人であると判断される。歯の咬耗は上・下顎の第1大臼歯でBrocaの2度、第2・第3大臼歯でBrocaの1度と軽微であることから高齢とは思わず、壮年段階（20～40歳）と推定される。

性別の判定

頭骨の乳様突起ならびに外後頭隆起の発達は弱く、頭骨・四肢骨とも華奢であることから、女性と思われる。

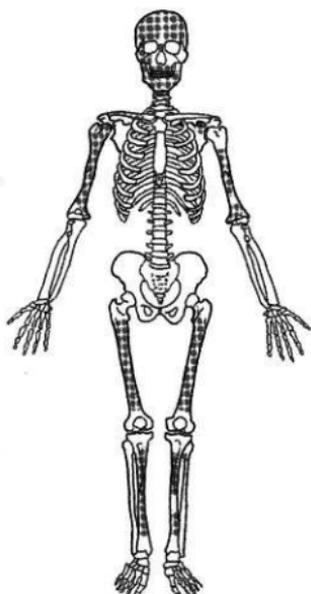


図1 出土人骨の残存部（塗色部分）

身長

全長が保存される四肢骨はないが、比較的保存のよい左右の大腿骨について肉眼解剖学的知見にもとづき原形を想定してみたところ、最大長は360~380mmと推定された。この値から藤井(1960)の方法と佐宗・埴原(1998)の方法で身長を算出すると、藤井の方法では141~146cm、佐宗・埴原の方法では140~144cmの値が得られた。中世鎌倉の女性の平均身長は140cm台後半であり(長岡ほか, 2008)、本人骨は当時としてはやや小柄であったと考えられる。

形態学的特徴

頭骨の計測値を表1、頭蓋形態小変異の観察結果を表2に示す。四肢骨は右大腿骨の一部のみが計測可能であり、この計測値は本文中に記載する。

頭骨: 頭蓋の上面観は前方が狭く、前後にややひしゃげたおむすび形である。脳頭蓋最大長172mm(グラベラの表面が剥落しているため参考値)、脳頭蓋最大幅146mm、頭蓋長幅示数は84.9で、過短頭に近い短頭である。一般に中世人骨の頭骨は前後に長い長頭のものが多く、本例の頭の前は典型的な中世人骨とは異なるものといえよう。後面観は各辺が緩やかな弧をえ

がく五角形で、頭頂結節がやや発達している。三主縫合は外板・内板ともに閉じていない。顔面中央部を欠損するため、前面観の特徴は不明。眼窩上縁は左側のみが保存されており、眼窩上孔が認められる。舌下神経管は二分しない。

歯: 左上顎側切歯の歯槽が閉鎖しており、生前脱落と考えられる。上顎中切歯の舌側面はいわゆるシャベル状を呈する。左右の上顎第1大臼歯にカラベリ結節は認められない。

四肢骨: 四肢長骨はいずれも華奢である。上腕骨において三角筋粗面の発達は弱い。大腿骨の粗線はほとんど発達せず、骨幹部後面は柱状性を呈さない。右大腿骨の骨体中央矢状径は22mm、骨体中央横径は24mm、骨体中央周は72mm、

表1 頭骨の計測値と示数

| Martin's No. | 計測項目 | 計測値 (mm) |
|--------------|------------|----------|
| 1 | 脳頭蓋最大長 | (172) |
| 8 | 脳頭蓋最大幅 | 146 |
| 8/1 | 頭蓋長幅示数 | (84.9) |
| 9 | 最小前頭幅 | 89 |
| 9/8 | 横前頭頂示数 | 61.0 |
| 17 | バジオン・プレグマ高 | 136 |
| 17/1 | 頭蓋長高示数 | (79.0) |
| 17/8 | 頭蓋幅高示数 | 93.2 |
| 40 | 顔長 | (93) |
| 61 | 上顎齒槽突起幅 | 60 |
| 71 | 下顎枝幅 | 41 |

括弧内は参考値

表2 形態小変異の出現状況

| | | R | L |
|-----------------------------------|-----------|---|---|
| Metopism | 前頭縫合 | - | / |
| Supraorbital nerve groove | 眼窩上神経溝 | - | - |
| Supraorbital foramen | 眼窩上孔 | / | + |
| Ossicle at lambda | ラムダ小骨 | - | - |
| Biasterionic suture trace | 横後頭縫合痕跡 | - | - |
| Asterionic bone | アステリオン小骨 | - | - |
| Occipito-mastoid wormians | 後頭乳突縫合骨 | - | - |
| Parietal notch bone | 頭頂切痕骨 | - | / |
| Condylar canal patent | 顎管開存 | / | - |
| Precondylar tubercle | 前顎結節 | - | - |
| Paracondylar process | 傍顎突起 | / | - |
| Hypoglossal canal bridging | 舌下神経管二分 | - | - |
| Foramen of Huschke | フシケ孔 | - | - |
| Foramen ovale incomplete | 卵円孔形成不全 | - | - |
| Foramen of Vesalius | ベサリウス孔 | - | - |
| Pterygo-spinous foramen | 翼棘孔 | / | - |
| Medial palatine canal | 内側口蓋管 | / | / |
| Transverse zygomatic suture trace | 横顔骨縫合痕跡 | / | / |
| Jugular foramen bridging | 頸静脈溝二分 | / | - |
| Sagittal sinus groove left | 矢状洞溝左折 | - | - |
| Clinoid bridge | 床状突起間骨橋 | / | / |
| Mylohyoid bridging | 顎舌骨筋神経溝骨橋 | - | / |

+ : present, - : absent, / : unknown

骨体中央断面示数は91.7である。

古病理学的特徴

上・下顎の第2大臼歯に、軽度のエナメル質減形成が確認された。エナメル質減形成とは、歯冠が形成される乳・幼児期に栄養障害や疾患などの障害的因子が作用することで発生したエナメル質の量的欠損である。減形成の存在から、この中世人骨が幼少期に何らかのストレスにさらされる環境にあったことがうかがわれる。もっとも、中世集団における減形成の出現頻度は比較的高いので、本人骨が特に劣悪な環境にあったかどうかまではわからない。その他、頭骨・四肢骨にめだつた病変は認められず、歯に齶蝕も見当たらない。

まとめ

下新兵衛屋敷跡遺跡から出土した中世人骨は、壮年の女性であり、頭骨、頸椎、上腕骨、大腿骨、脛骨などが残存する。身長は140cm台前半で、中世鎌倉の女性平均身長からみるとやや小柄である。頭蓋長幅示数は84.9で短頭に分類される。軽度のエナメル質減形成が認められたが、重篤な傷病変は見当たらなかった。

文献

- 佐宗亜衣子・埴原恒彦 (1998) 日本人女性の新しい身長推定式. *Anthropological Science (Japanese Series)*, 106: 55-66.
- 長岡朋人・平田和明・大平里沙・松浦秀治 (2008) 鎌倉市由比ヶ浜南遺跡から出土した中世人骨の身長推定. *Anthropological Science (Japanese Series)*, 116: 25-34.
- 馬場悠男 (1991) 人骨計測法. 人類学講座別巻1, 雄山閣, 東京.
- 藤井明 (1960) 四肢長骨の長さとの関係に就いて. 順天堂大学体育学部紀要, 3: 49-61.



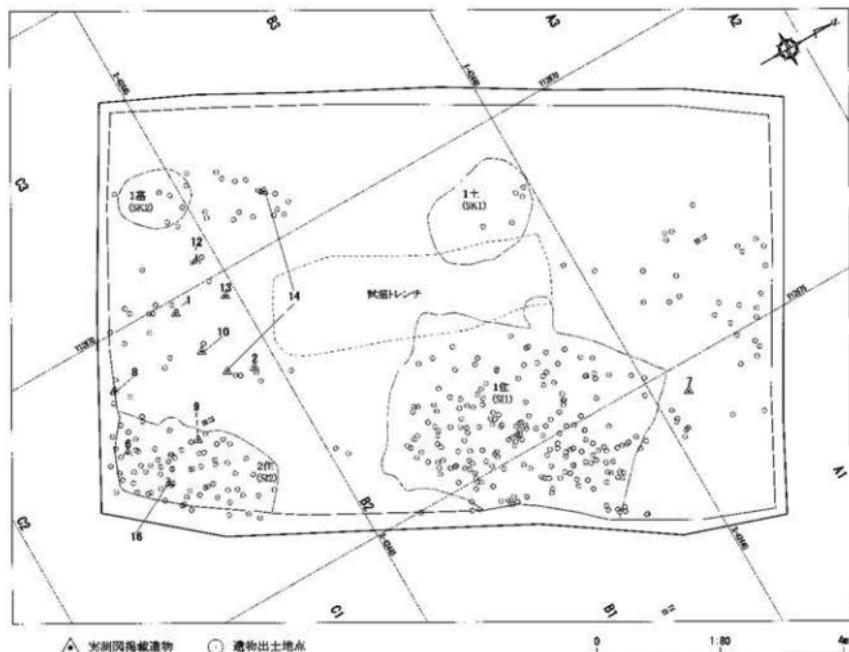
上段 頭骨前面、右側面 下段 1 下顎骨右側、2 下顎骨左側、3 左肩甲骨、4 右鎖骨、5 右上腕骨、
6 左上腕骨、7 右大腿骨、8 左大腿骨、9 右脛骨、10 左脛骨 (スケールバー: 5cm)

出土人骨写真

第5節 遺構外出土遺物

出土状況：（第12図）

遺構外出土遺物の多くは基本層序4層（遺物包含層）から出土している。グリッド一括取り上げ遺物も含め、調査区内での遺物出土地点に際立った偏りは認められなかった。古墳時代から平安時代までの遺物が混じり合った状態で出土した。図上では堅穴建物と重なる位置に遺物が集中していることから、調査区内に4層が堆積した時点では堅穴建物の位置が窪んでいた可能性も考えられる。ただし4層に至る攪乱の存在も考慮する必要がある。



第12図 遺物出土記録地点

遺物：（第13図、写真40・41）

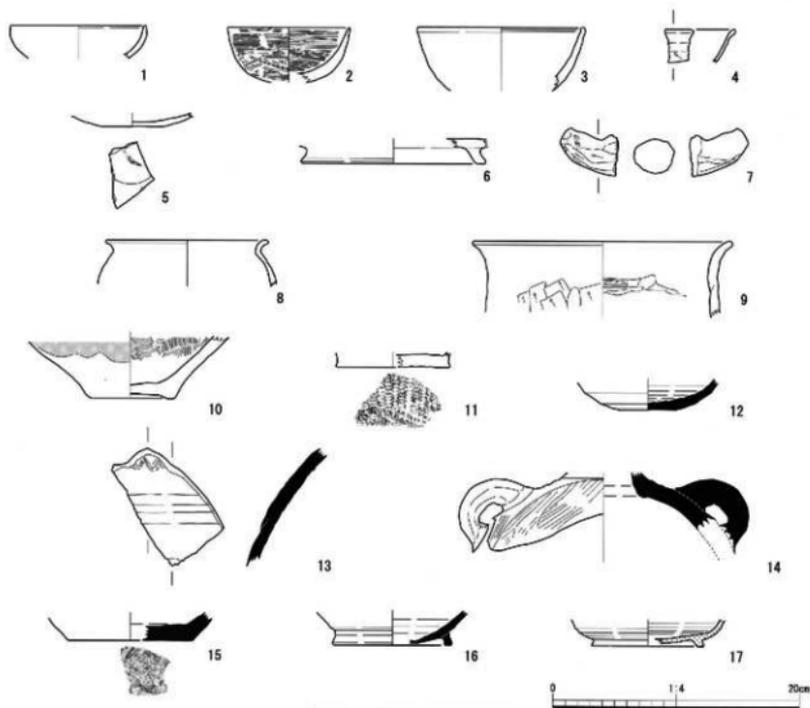
図示できた出土遺物は土師器12点、須恵器4点、灰軸陶器1点である。

1～5は土師器坏である。1は外面を、2は内外面ともにヘラミガキする。3は口縁端部内面に段がつく。4は口縁端部が玉縁状を呈し、体部下位をヘラケズリする。5は体部下位から底部までをヘラケズリし、底部には墨書がみられる。6は土師器の高台付の皿か。7は土師器の瓶の把手部である。上半はナゲ調整し、下半をヘラケズリする。8～11は土師器の甕である。8・9は口縁部で、9は体部外面をヘラケズリする。10・11は底部である。10は、内面にハケ調整を施し、外面は赤彩する。11の底部には網代痕が残る。

12は須恵器坏である。内面はロクロナゲし、外面を回転ヘラケズリする。13は須恵器甕の口縁部で、櫛描きの波状文が施される。14は須恵器の提瓶か。肩部の把手は環状を呈す。

体部正面はタタキ調整する。15・16は須恵器の壺とみられる。15の底部の切り離しは回転糸切りである。16は内面をロクロナデし、外面をヘラケズリし、高台を貼り付ける。内底面に自然釉がかかる。

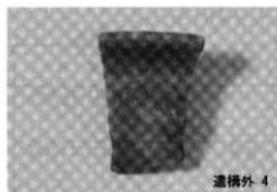
17は灰釉陶器の碗である。内面をロクロナデし、外面はヘラケズリする。遺構外からの出土遺物には古墳時代後期から平安時代後半までの幅広い時期の遺物がみられ、隣接する堀ノ内遺跡・五里原遺跡などと同様の様相を呈している。1・2・7・12～14は7世紀代の所産か。15は糸切り痕が見られることから8世紀以降、17は9世紀後半のK-14窯式に比定される。4～6は10世紀代の所産とみられる。



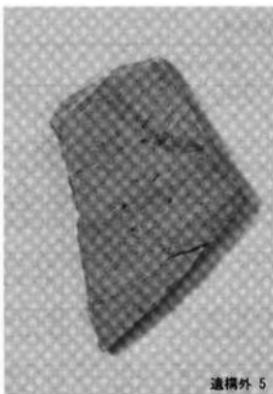
第13図 遺構外遺物実測図



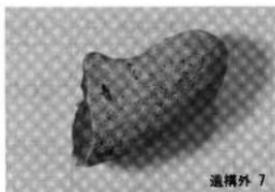
40. 遺構外 出土遺物 (1)



遺構外 4



遺構外 5



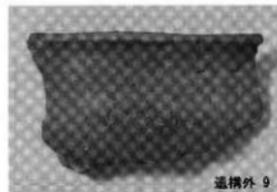
遺構外 7



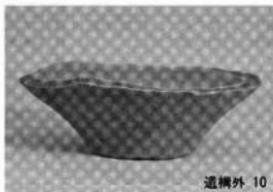
遺構外 6



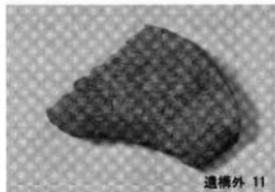
遺構外 8



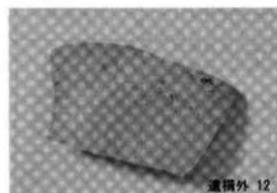
遺構外 9



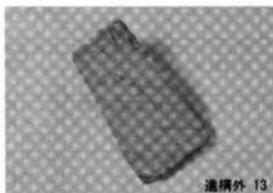
遺構外 10



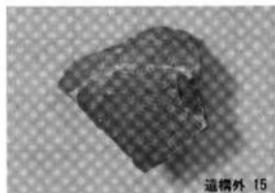
遺構外 11



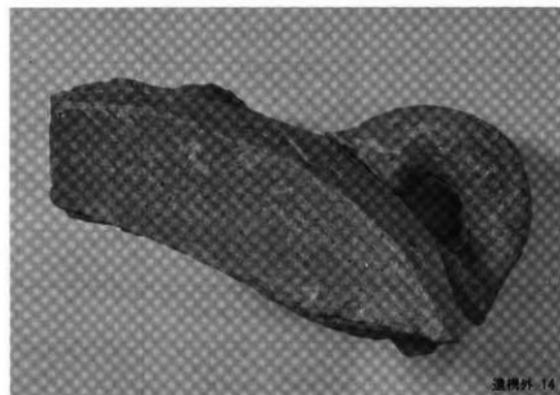
遺構外 12



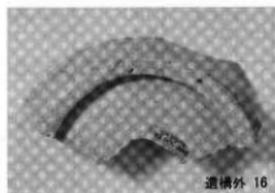
遺構外 13



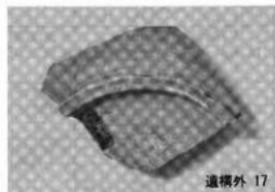
遺構外 15



遺構外 14



遺構外 16



遺構外 17

41. 遺構外 出土遺物 (2)

表1 1号窯穴建物(SI-1)出土遺物観察表

| 遺物番号 | 器種 | 法量(cm) | 調整の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|-----------|----------------------------------|---|---|-----------------|
| 1 | 土師器 環 | 口径 (11.8) 器高 3.4 底径 - | 口縁部横ナデ、内面ナデ。 | 胎土は密で、色調は橙色。焼成良好。 | 口縁部1/4~底部1/3 |
| 2 | 土師器 環 | 口径 (12.0) 器高 3.3 底径 - | 口縁部横ナデ。口縁端部は外方へつまみ出される。外面体部中位~下位と内面はヘラミガキ。 | 胎土は密で、色調は灰白色。焼成良好。 | 口縁部1/6~体部下位 |
| 3 | 土師器 環 | 口径 器高 底径 | - 外・内面非線密なヘラミガキ。口縁部と体部の境に稜を持つ。赤影が施されている。 | 胎土は密で、色調は赤褐色。焼成良好。 | 体部破片 |
| 4 | 土師器 環 | 口径 (16.4) 器高 4.7 底径 (10.6) | 体部外面は下半をヘラケズリ。中位に指押え痕。内面はナデ、底面に木葉痕。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は橙色。焼成良好。 | 口縁部1/5~底部1/4 |
| 5 | 土師器 環 | 口径 14.4 器高 3.7 底径 9.7 | 口縁端部を横ナデし稜を持つ。体部は底面までヘケ調整。内面は横ナデ。 | 胎土は密で、色調は橙色。焼成良好。 | 口縁部1/2~底部2/3 |
| 6 | 土師器 環 | 口径 (20.8) 器高 3.3 底径 14.2 | 口縁端部は横ナデし稜を持つ。体部外面は横・斜位のハケ調整、底部もハケ調整。内面は横ナデ。 | 胎土は密で赤褐色粒、白色粒、金雲母含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部1/4~底部2/3 |
| 7 | 土師器 環 | 口径 (13.0) 器高 底径 | - 口縁端部は横ナデし稜を持つ。体部は横・斜位のハケ調整。内面は横ナデ。 | 胎土は密で、色調は外面にぶい黄褐色、内面橙色。焼成良好。 | 口縁部1/5~底縁僅 |
| 8 | 土師器 環 | 口径 (13.4) 器高 4.6 底径 9.6 | 外面はロクロナデ後、体部中位~下半をヘラミガキ。底部はヘラケズリ。内面は中位以下をヘラミガキし放射状に線刻を施す。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は外面にぶい橙色、内面橙色。焼成良好。 | 口縁部1/2~底部 |
| 9 | 土師器 環 | 口径 器高 4.6 底径 4.0 | - 外面はロクロナデ後、体部下半に斜位のヘラケズリ。底部はヘラケズリ。内面ロクロナデ。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は橙色。焼成良好。 | 完形、甲斐型土器 |
| 10 | 土師器 環 | 口径 (16.6) 器高 底径 | - 口縁部縦線状。外面はロクロナデ後、体部下半をヘラケズリ。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部~体部下位小、甲斐型土器 |
| 11 | 土師器 羽釜 | 口径 器高 底径 | - 口縁部はナデ、袴部はハケ調整。内面は縦位のハケ調整。指痕有。 | 胎土は密で砂礫・白色粒含む。色調は赤褐色。焼成良好。 | 袴部破片 |
| 12 | 土師器 甕 | 口径 (15.0) 器高 底径 | - 外面は口縁部はナデ、体部は縦位のハケ調整。内面はナデ。 | 胎土は密で金雲母、細砂粒含む。色調はぶい赤褐色。焼成良好。 | 口縁部1/8 |
| 13 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 | - 外面はナデ。内面はハケ調整。 | 胎土は密で白色粒、粗砂粒含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 14 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 | - 外面は縦位のハケ調整、内面は横位のハケ調整。 | 胎土は密で白色粒含む。色調は橙色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 15 | 土師器 甕 | 口径 (25.0) 器高 底径 | - 内外面横ナデ。 | 胎土は密で赤褐色粒、細砂粒含む。色調は外面橙色、内面明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 16 | 土師器 甕 | 長さ 幅 厚さ | - 外面の体部上~中位は縦位のハケ調整、下位は縦位のハケ調整後、横位のハケ調整。内面は横位のハケ調整。球球形。 | 胎土は密で細砂多く含む。色調は赤褐色。焼成良好。 | 頸部小~体部中位1/5 |
| 17 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 5.0 | - 内外面ナデ。底部に木葉痕。 | 胎土は密で赤褐色粒、細砂粒含む。色調は外面にぶい赤褐色、内面にぶい橙色。焼成良好。 | 体部下位小~底縁1/6 |
| 18 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 6.8 | - 外面は縦筋により調整不明。内面はナデ。底部に木葉痕。 | 胎土は密で細砂を多く含む。色調は赤褐色。焼成は良。 | 体部中位1/5~底部 |
| 19 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 8.2 | - 体部外面は縦位のハケ調整。底部はナデ。底部に木葉痕。 | 胎土は細砂粒、雲母含む。色調はぶい橙色。焼成良好。 | 底部2/3 |
| 20 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 9.8 | - 外面の体部下半はハケ調整。内面は横位のハケ調整。底部に木葉痕。 | 胎土は白色粒、細砂粒含む。色調は外面にぶい赤褐色、内面明赤褐色。焼成良好。 | 体部下位小~底部1/5 |

※法量の()は復元値、< >は遺存値を示す。

| 遺物番号 | 器種 | 法量 (cm) | 調整の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|-------------|----------------------------|---|--|---------------|
| 21 | 須恵器 外蓋 | 口径 14.2 器高 4.3 底径 - | 内外面クロコナデ。外面は全面に自然釉がかかる。 | 胎土は密で細砂粒、黒色粒含む。色調は外面(釉調)灰オリーブ色、内面灰白色。焼成良好。 | ほぼ完形(口縁部一部欠損) |
| 22 | 須恵器 高台付坏 | 口径 11.4 器高 11.4 底径 - | 底面は回転ヘラ切り後、高台貼り付け。内面はクロコナデ。 | 胎土は密で、色調は黄灰色。焼成良好。 | 底部1/5 |
| 23 | 須恵器 高台か | 口径 17.0 器高 - 底径 - | 内外面クロコナデ。 | 胎土は密で、色調は外面は黄灰色、内面は灰白色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 24 | 灰釉陶器 蓋 | 口径 9.2 器高 - 底径 - | 内外面クロコナデ。底面はヘラ切り。貼り付け高台。外面全体に釉。底面の一部に釉付着。 | 胎土は密で細砂含む。色調は灰白色、釉調は灰白色。焼成良好。 | 体部中位～底部 |
| 25 | 石製品 勾玉 | 長さ 3.1 幅 1.9 厚さ 0.9 | 形状はコの字形、両面穿孔。 | 滑石製。色調はオリーブ灰色。 | 完形 |

表2 2号壺穴建物(SI-2)出土遺物観察表

| 遺物番号 | 器種 | 法量 (cm) | 調整の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|-----------|----------------------|-----------------------------------|--------------------------------------|---------|
| 1 | 土師器 環 | 口径 - 器高 - 底径 - | 内外面横ナデ。口縁部と体部の境に段。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は橙黄色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 2 | 土師器 坏 | 口径 - 器高 - 底径 - | 内外面横ナデ。口縁部と体部の境に段。赤彩あり。 | 胎土は密で細砂含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 3 | 土師器 坏 | 口径 - 器高 - 底径 - | 外面の口縁部は横ナデ。体部はヘラミガキ。口縁部はやや内湾する。 | 胎土は密で雲母含む。色調は灰褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 4 | 土師器 坏 | 口径 - 器高 - 底径 - | 口縁部は内外面横ナデ。体部外面ヘラケズリ。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は灰黄褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 5 | 土師器 坏 | 口径 - 器高 - 底径 - | 口縁部横ナデ。口縁端部は内湾する。 | 胎土は密で雲母、白褐色粒含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 6 | 土師器 坏 | 口径 - 器高 - 底径 - | 内外面ナデ。 | 胎土は密で、色調はにぶい橙黄色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 7 | 土師器 高台 | 口径 - 器高 - 底径 - | 外面はヘラケズリ後ナデ。坏部の内底面黒化。 | 胎土は密で赤褐色粒含む。色調は灰褐色。焼成良好。 | 脚部1位1/4 |
| 8 | 土師器 甕 | 口径 - 器高 - 底径 - | 内外面横ナデ。 | 胎土は密で白色粒含む。色調はにぶい褐色。焼成良好。 | 口縁部小片 |
| 9 | 土師器 甕 | 口径 - 器高 - 底径 - | 外面は縦位のハケ調整後ナデ。内面は横位のハケ調整後縦位のハケ調整。 | 胎土は密で微砂粒含む。色調は外面はにぶい赤褐色、内面は橙黄色。焼成良好。 | 体部中位 |
| 10 | 土師器 甕 | 口径 - 器高 - 底径 - | 外面はハケ調整。内面は摩耗により不明。粘土接合痕が残る。 | 胎土は密で細砂多く含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 体部破片 |

表3 2号上坑(SK-2)出土遺物観察表

| 遺物番号 | 器種 | 法量 (cm・g) | 調整の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|------------|----------------------------|-------|----------|-----------|
| 1 | 銅銭 未索通立 | 径 2.4 厚さ 0.1 重さ 2.93 | - | - | 初鋳造年1408年 |
| 2 | 銅銭 〇〇元立 | 径 2.4 厚さ 0.1 重さ 2.48 | - | - | |
| 3 | 銅銭 薄化元宝 | 径 2.4 厚さ 0.1 重さ 2.97 | - | - | 初鋳造年990年 |
| 4 | 銅銭 釈迦元宝 | 径 2.4 厚さ 0.1 重さ 2.60 | - | - | 初鋳造年1094年 |

※法量の()は復元値、< >は遺存値を示す。

表4 遺構外川十遺物観察表

| 遺物番号 | 器種 | 法量 (cm) | 調整の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|-------------|--------------------------------------|---|---------------------------------------|------------------|
| 1 | 土師器 杯 | 口径 器高 底径 (10.8) - | 外面は横ナゲ後、ヘラミガキ。内面は横ナゲ。内外面黒化。 | 胎土は密で赤褐色粒、白色粒を含む。色調は黒色。焼成良好。 | 口縁部 1/10～体部下位 小 |
| 2 | 土師器 杯 | 口径 器高 底径 (9.8) - | 内外面、細い稜体の工具による密なヘラミガキ。 | 胎土は密で金雲母含む。色調は灰黄褐色。焼成良好。 | 口縁部 1/4～体部下位 1/4 |
| 3 | 土師器 杯 | 口径 器高 底径 (13.1) - | 内外面ナゲ。口縁端部の内面はナゲによって段がつく。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調は灰黄褐色。焼成良好。 | 口縁部 1/8～体部下位 |
| 4 | 土師器 杯 | 口径 器高 底径 - | 口縁部クロコナデ。体部外面はヘラケズリ。口縁端部は玉縁状。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調はぶい褐色。焼成良好。 | 口縁部 小片 甲尖型土器 |
| 5 | 黒書土器 杯 | 口径 器高 底径 (5.0) - | 外面は体部下半から底部はヘラケズリ。内面は横ナゲ。外底面に鑿文。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調は棕色。焼成良好。 | 体部下位～底部 1/4 |
| 6 | 土師器 高台付皿 | 口径 器高 底径 (14.6) - | 外面は横ナゲ、内面はナゲ。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調は棕色。焼成良好。 | 高台部 |
| 7 | 土師器 甕 | 長さ 幅 厚さ (4.6) 3.3 2.8 | 把手部の上半はナゲ、下半はヘラケズリ。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調は橙色。焼成良好。 | 把手部 |
| 8 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 (13.0) - | 内外面に横ナゲ。 | 胎土は密で、色調は灰褐色。焼成良好。 | 口縁部 1/6 |
| 9 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 (20.8) - | 外面は口縁部を横ナゲ、体部上位は縦位のヘラケズリ。内面は接合痕をヘラ状工具と指でナゲ削す。 | 胎土は密で白色粒含む。色調は明赤褐色。焼成良好。 | 口縁部 1/6～体部上位 |
| 10 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 8.5 - | 外面はヘラミガキか。内面は縦位のハケ調整。外面に赤彩あり。破断面はほぼ水平に割れている。 | 胎土は密で赤褐色粒を含む。色調はぶい棕色。焼成良好。 | 体部下位～底部 |
| 11 | 土師器 甕 | 口径 器高 底径 (9.0) - | 底部に網代痕。内面はナゲ。 | 胎土はやや粗く細砂含む。色調は外面にぶい黄橙色、内面赤褐色。焼成良好。 | 底部 1/5 |
| 12 | 須恵器 杯 | 口径 器高 底径 (4.4) - | 底部は回転ヘラケズリ。内面はクロコナデ。 | 胎土は密。色調は黄灰色。焼成良好。 | 体部中位～底部 2/3 |
| 13 | 須恵器 壺 | 口径 器高 底径 - | 内外面ヨコナゲ。外面上部に波状文。下部に接合痕。 | 胎土は密。色調は灰白色。焼成良好。 | 口縁部 |
| 14 | 須恵器 埴瓶 | 長さ 幅 厚さ (14.0) (6.0) 1.6 | 外面の体部正面はタタキ目。側面はナゲ。内面は器面剝離により調整不明瞭。 | 胎土は密で赤褐色粒、細砂含む。色調は外面黄灰色、内面黄灰色。焼成やや不良。 | 肩部 1/6、把手部 |
| 15 | 須恵器 並か | 口径 器高 底径 (10.0) - | 内面クロコナデ。底部に回転糸切り痕。 | 胎土は密で、色調は黄灰色。焼成良好。 | 底部 1/6 |
| 16 | 須恵器 高台付壺 | 口径 器高 底径 (9.4) - | 外面はヘラケズリ。内面はクロコナデ。内底面に自然輪がかかる。 | 胎土は密。色調は黄灰色。焼成良好。 | 底部 1/3 |
| 17 | 灰輪陶器 碗 | 口径 器高 底径 (9.0) - | 外面の体部下半・底部はヘラケズリ。内面はクロコナデ。 | 胎土は密。色調は灰黄色。焼成良好。 | 体部下位～底部 1/4 |

※法量の () は復元値、< > は遺存値を示す。

第4章 まとめ

第1節 下新兵衛屋敷跡

『甲斐国志』(文化十一年(1814)年)には下新兵衛館および下新兵衛に関して以下の記述がある。

『甲斐国志』卷之四十一「古蹟部第四」

○下新兵衛居址 貳百坪許見置地アリ土庶部ニ記セリ

『甲斐国志』卷之九十八「人物部第七 武田氏将師之三」

一 今福氏 地名ハ奈胡庄ニ在リ…○今福丹波守 軍鑑ニ浄閑ノ男元龜元年原甚四郎改易其同心ヲ預リ士隊ヲトナル浄閑と同シク久能城代也…○市左衛門昌私 軍鑑ニ浄閑ノ二男…軍鑑ニ七拾騎ノ内ニ原美濃ノ同心三拾騎アルニヨリ手前四拾騎の内ニテ拾騎ハ市左衛門ニ添ヘル美濃同心ニ名ヲ得タル剛者下新兵衛アリ波辺ト云モ其内ニアリト云然レバ丹波ニ苳四郎同心ヲ預ケラルト云ニ相混セリ父子一人ト為スル事尤モ謂アルニ似タリ…

『甲斐国志』卷之百六「土庶部第五 八代郡小石和筋」

一 下新兵衛(南八代村) 宅跡アリ軍鑑ニ原美濃守ノ同心ニ在リ波辺下新兵衛ナド覚ノ者ナリ後ニ今福浄閑ノ属甲トナリ息子亦左衛門ニ附ラルト見エタリ大宮神馬奉納記ニ下但馬守アリ北八代ニ小下丁、小下組ト云地名モ存シタレハ本村ノ素生ナルヘシ上杉家直江山城ノ陪臣ニ下治右衛門アリ武名ノ士ナリ後最上家ニ降り対馬ト改ム烈祖成績編年集成等ニ志茂ニ作ル皆同族ナリト云

一 野沢伝五左衛門(同村) 苗字帯刀ノ浪人ナリ家記云本姓は信州伴野氏ヨリ出ヅ大永中野沢善助武田家ニ仕ヘ其孫作左衛門ト云者は下新兵衛ガ惣ナリ男二人ヲ産ム長子四郎右衛門ヨリ相承ケテ今七代ナリト云里長藤右衛門亦同流ナリ

『甲斐国志』から読み取る事ができる下新兵衛に関してまとめてみると、

①南八代村に館跡が在り、広さは貳百坪程の見置地がある。(卷之四十一)

②原甚四郎の同心であったが、元龜元年原甚四郎改易により今福丹波守に同心衆は引継がれ、さらにその息子市左衛門に仕えた。(卷之九十八、百六 下新兵衛の項)

③野沢善助の孫の作左衛門は、下新兵衛の娘婿になり、その長男四郎右衛門から相承して七代目になる藤右衛門は、里長として『甲斐国志』の編纂された文化十一年には存命していた(卷之百六 野沢伝五左衛門の項)。ただし、所在は不明である。

その他の文献では、

『甲陽軍鑑』品第廿七 眞田弾正武略之事付長野信濃板垣信形等事

井山木勘助國々之例引事、信州上田原合戦之事

「(略)

天文十六年丁未二月廿一日…

(略)

同月廿四日に…扱美濃守乗よせ敵ちかくにて馬よりおりたち鎧をおつ取て原美濃大音上て名乗追てくる敵を馬より四騎ついておとし申され美濃同心に、しも新兵衛と申剛の者来て敵一敵についておとす…(高坂弾正著、山口弘道校 甲府：温故堂、明25、26 国会図書館「近代デジタルライブラリー」)

と、敵兵一名を倒した事を見る事が出来る。

また、『天正壬午武田諸士起請文』(『甲斐叢書』巻八)今福筑前守(今福市左衛門)衆の署名の中では、筆頭で下新兵衛の名前が確認できる。

『天正壬午武田諸士起請文』は、武田氏滅亡後の天正十年(1582)7月に信濃、8月には甲斐の諸武上が徳川家康に忠誠を誓った起請文である。今福市左衛門自身は、天正十年、木曾義昌を攻めたが烏井峠合戦で1月から3月の間に討死したと言われている。

以上の文献から、下新兵衛の名は、天文十六(1547)年から天正十(1582)年まで35年間に亘って確認する事ができた。但し、武田家滅亡後の足取りは今後の検討課題である。

『甲斐国志』の下新兵衛の記述に関連して下一族に関する記述も見ることができる。

「…大官神馬奉納記ニ下但馬守アリ北八代ニ小下丁、小下組ト云地名モ存シタレハ…」

下但馬守に該当する人物に関しては、群馬県倉湖村(現高崎市倉湖町)関連の『武井満彦氏所蔵文書』(『武井文書』)中に以下の書状がある(群馬県立文書館「古文書・県史資料目録」)。

「武田家朱印状写(味方への勧誘と宛行約束)永禄4年12月2日(龍朱印)下諏方宰相宛

「武田信玄判物(諏訪城攻略に付下弾正分の知行宛行)永禄5年2月10日(信玄花押)宰相宛

「某朱印状(武具調達依頼)(元龜3年)千申年2月5日(某朱印)下源五左衛門尉宛

「武田家定書(兄但馬守知行分の宛行及び以後の忠節依頼)天正9年6月23日跡部尾張守奉から

下源七郎宛

「北条家定書(知行地安堵及び武具調達依頼)天正11年3月2日(虎朱印)下主税助宛

「武田信玄判物(味方への勧誘と宛行約束)10月1日信玄から諏方宰相宛

この書状には①上野国群馬郡の地侍で武田勝頼に仕えた②武田家滅亡後一族の下主税助は北条氏政に仕えた等の記述があり、この系統の下氏に該当すると思われる。なお、ここに出てくる諏訪城は花井田城を指し上野国碓氷郡(群馬県安中市)にある。

その他、下家は「高崎市指定重要有形民俗文化財 猪毛の道祖神」の解説文で、「戦国時代元三沢の下家が三河の国からはるばる背負って来て守護神として祀ったという伝承があります。」と登場している。

なお、字名の小下丁、小下組から本村の素生ではないかと記述されている事に関しては、現在も八代町北に上小下、下小下という字名が確認できる。

下但馬守に関しては、武田家との繋がりがや下新兵衛と行動時期が重なる部分もあり、関連性に関して今後さらに検討する必要があると思われる。

「…上杉家直江山城ノ陪臣ニ下治右衛門…」

文中の下治右衛門は、下秀久と思われる。『関川村史』によると、下秀久は、越後関川村(現新潟県関川村下関)に居住していた伊賀守下重実の子で、次右衛門、新兵衛、対馬守、吉忠・康久と名乗った。北条氏に属し上野沼田にあったが、北条氏没落の後直江兼続に随動した(米沢市立図書館「上杉家中諸士略系譜」)。秀久は、天正十四(1586)年蕨野合戦で上杉方本庄繁長に従い(『奥羽永慶軍記』)、慶長五(1600)年には、関ヶ原の役出羽合戦で最上領に侵入、その後酒田城攻撃、大山城将に任命される(佐久間昇校注『奥羽軍談』)。羽黒山五重塔には「慶長十三年…下対馬守康久」の名(『姓氏家系大辞典』)がある。

下秀久に関しては、直接的な武田家との関係を示す記述を見ることはできない。

下新兵衛は、生没年等不明な点が多いが、下新兵衛館に関わる遺構が解明され、古文書等により下新兵衛の実像がより鮮明になれば、八代の「剛者下新兵衛」がより親しみのある人物となる事と思う。

注)1 1570年 2 渡辺下新兵衛は、巻之九十八「…下新兵衛アリ渡辺ト云モ其内ニアリト云…」と渡辺某と下新兵衛が並記されており、渡辺下新兵衛は二人の名前の列挙と思われる。3 1565(永禄八年) 4 1727(享保十二)～1732(享保十七)年に安積澹泊によって編集された徳川家康の一代実録本 5 1547年

第2節 遺構遺物の検討

発掘調査の結果、下新兵衛居敷跡遺跡では調査面積77㎡を発掘し堅穴建物2軒(SI-1・2)、土坑2基(SK-1・2)と遺物包含層が検出された。出土遺物は古墳時代、奈良時代、平安時代、近世と時代幅があり、勾玉、土師器、須恵器、灰釉陶器、磁器などが出土している。調査区は浅川が形成した扇状地の扇尖部に立地している。調査区で確認した基本層序は1層が現代の駐車場砕石である。2層は盛土・攪乱で、近現代の根石が確認された。また近世の磁器皿の破片が1点、ビニールを伴い出土している。3層では土師器の小破片が散見できた。4層は遺物包含層で古墳時代から平安時代の遺物が混交し、調査区全体を被っている。5層は調査区南西側でのみ確認でき、5層上面で2号土坑(SK-2)を検出した。6層は扇状地の砂礫層である。50cm大の礫も含まれ浅川の営力が窺えた。6層上面では1・2号堅穴建物(SI-1・2)、1号土坑(SK-1)を検出した。

次に遺構、遺物、堆積土層などから当調査地点の変遷を考える。『八代町誌』(1975)によると浅川の扇状地は新旧に分けられ、「浅川の古い扇状堆積層はその上をローム層が被うことや地層が傾動していることなどから、第四期洪積世末のウルム氷期(おそらく5万～3万年前)ごろに形成され、さらに浅川の新しい扇状堆積層は洪積世末から沖積世始め(3万～数千年前)に形成されたと考えられる」とされている。またその分布域は「古扇状地は門林を扇頂として、小山城跡、御崎林の法城寺、森の上、岡部落西方付近まで広がった扇型の地形を示していた」「新しい浅川扇状地は岡部落を扇頂として長崎、永井、米倉各部落の西側はずれに達する扇型に分布し古い扇状地の上を被ってゆるやかな傾斜をしている」とある。そして表面の堆積では「古い浅川扇状地はローム混じりの砂礫層で構成されており表面は弱い凹凸があり厚いローム層に被われている」「新しい浅川扇状地の表面には小川もほとんどなくローム層に被われていない」ことが特徴付けられている。

発掘調査ではローム層は検出されずに6層である扇状地の砂礫層まで到達しているので、当調査地点は3万～数千年前に形成された新しい浅川扇状地上に立地していることが分かる。

この6層上面では1・2号堅穴建物(SI-1・2)、1号土坑(SK-1)が検出されている。1号堅穴建物(SI-1)は古墳時代後期、奈良時代、平安時代の遺物が出土しているが多くは流れ込みであり、遺構の時期を特定することは難しい。遺物の出土状況からは奈良時代の可能性が高い。2号堅穴建物(SI-2)は竈付近のみの検出と調査面積が狭く、出土遺物の量も少ないため遺構の時期を特定することは難しい。遺物は古墳時代後期の小片が見られるが流れ込みの可能性が高い。2号堅穴建物では遺構確認面(6層)上を基本層序4層(遺物包含層)が被っているのに対し、1号堅穴建物では間に一層入ることが確認されているため、2号堅穴建物は1号堅穴建物よりも後出する可能性もある。1号土坑(SK-1)からは覆土中からの出土と捉えられる遺物が少ないため時期を判断できない。しかし、1・2号堅穴建物は4層が調査区に流れ込み堆積した時点で、窪みがあり遺物が流れ込んでいるのに対して、1号土坑はすでに埋まり切っており4層の影響を受けていないと考えられるため1号土坑は1・2号堅穴建物より先行する可能性がある。

基本層序5層は調査区南西側でのみ確認できた土層であるが、その上面で2号土坑が検出されている。2号土坑からは屈葬人骨と4枚の銅銭が出土している。銅銭の内3枚は「淳化元宝」「紹聖元宝」「永樂通宝」と判読できた。「永樂通宝」の初鑄造年から2号土坑の上限は15世紀初頃と考えた。また「寛永通宝」が含まれていないことから下限は17世紀初頃の可能性がある。2号土坑上には礫が寄せられており、礫の頭が基本層序4層の上面の高さとほぼ同じであったため、2号土坑と4層の正確な新旧関係は現場で確認でき

ていない。2号土坑は15世紀以降であること、基本層序2層の攪乱には近世磁器が混入するが、多量の遺物を包含する4層からは中世以降の遺物が見当たらないことなどから、5層上面で検出した2号土坑は4層を掘り込み形成されたと考えられる。

2号土坑に埋葬された人骨の姿勢は北頭位側臥屈葬で、土葬されている。下部遺構は底面が平らな楕円形の土坑で、木棺は検出していない。上部遺構は礎が寄せられているが、それ以上は不明である。77㎡と狭い調査区内の隅に位置するため、単独墓か集団墓か判断は難しいが、墓が重なる様な密度はないといえる。当調査区は『和妙類聚抄』に見える八代郷と推定され古代より集落が営まれていることから集落内の墓といえる。また当地は『甲斐国志』や『甲斐国社記・寺記』に見られる万福院（本山修験宗：総本山聖護院（京都））の地とされているため、集落内寺院に伴う墓ということも考えられる。しかし、万福院は『甲斐国社記・寺記』に「別段由緒等之儀者可申上事無御座候」「右者諸書物焼失中占玉善院々当方万福院善幸迄凡十二代住居仕候夫々前々之儀者何代相立候哉相知不申候」とあり、近世末からどこまでかおられるかは不詳とされている。2号土坑の下限が17世紀初頭といえる可能性があることから2号土坑は下新兵衛屋敷の屋敷墓としての土壌墓と考えたい。

最後に、下新兵衛屋敷跡遺跡と周辺の発掘調査事例との基本土層の比較を行う。堀ノ内遺跡（1996）ではローム層が検出され、遺構確認面となっている。五里原遺跡（1983）、三光神遺跡（1987）：後に遺跡名は下長崎遺跡に名称変更）では砂礫層が検出されている。各遺跡の標高と下新兵衛屋敷跡遺跡との位置関係は堀ノ内遺跡：標高295m・東へ150m、下新兵衛屋敷跡遺跡：標高292.8m、五里原遺跡：標高283m・西へ350m、三光神（下長崎）遺跡：標高283m・南西へ900mである。下新兵衛屋敷跡遺跡よりも扇状地の上方である堀ノ内遺跡ではローム層が検出され、下新兵衛屋敷跡遺跡から下方の遺跡ではローム層が検出されずに砂礫層に到達していることから、堀ノ内遺跡は古い浅川扇状地上、下新兵衛屋敷跡・五里原遺跡・三光神（下長崎）遺跡は新しい浅川扇状地上に立地しているといえる。そして新旧扇状地の境目が下新兵衛屋敷跡遺跡と堀ノ内遺跡の150m間に存在していることになる。また、扇状地の形成年代から新しい扇状地が堆積した範囲では旧石器時代から縄文時代の遺構遺物は流失または流動している可能性も指摘できる。堀ノ内遺跡では縄文時代中期の遺構が検出され、三光神（下長崎）遺跡から出土した縄文時代前期の土器は砂礫層上に堆積した氾濫層から出土しているということは、これと矛盾しないといえる。

新しい浅川扇状地上にある3遺跡で砂礫層までの深さを比較すると下新兵衛屋敷跡遺跡0.9～1.3m、五里原遺跡（1983）0.4～0.9m、三光神（下長崎）遺跡（1987）2.5mである。下新兵衛屋敷跡遺跡では盛土（基本層序1・2層）が確認できるので、その分の0.5～0.7mを減じて良いとすると砂礫層までの深さは0.2～0.8mとなる。これは扇状地の扇頂部側は堆積が薄く、扇端部側は厚いという傾向を示すことになる。他の2遺跡とは異なり下新兵衛屋敷跡遺跡では砂礫層を掘り込んで遺構を構築しているが、これは砂礫層上の堆積が薄かったため仕方なく掘り下げただけといえるかもしれない。

また五里原遺跡（2007）では遺物包含層から県内2例目となる子持ち勾玉（滑石製）が出土している。下新兵衛屋敷跡1号堅穴建物から出土した勾玉も層位的には遺物包含層が流れ込んだものと判断している。この他に遺物包含層中には遺構外出土として提瓶があり、また平成19年に笛吹市教育委員会が実施した試掘調査では平瓶も出土している。当地周辺には多くの古墳が存在するが浅川の氾濫は古墳をも流失させているのかもしれない。

なお、下新兵衛屋敷跡1号堅穴建物から出土した勾玉は滑石製と判断した。実見では蛇紋岩製とも見て取れたが、赤外分光光度計、顕微ラマン分光計、比重の測定などを行い滑石と判断した。また、蛍光X線分析でクロム、ニッケルなどが検出されたことから蛇紋岩を

母岩とした滑石と判定した。

最後に発掘調査から報告書作成作業にあたり、ご指導ご協力を賜りました各位・機関にお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 石井進・萩原三雄編1993『中世社会と墳墓』
桂田 保1975「地形と地質」『八代町誌』pp. 3-32
清雲俊元・萩原三雄監修2004『峡東今昔写真帖』
高森圭介1980原本現代訳『甲斐軍艦』
鶴間正昭2009「南武蔵・相模の土器様相と地域間交流」『古代社会と地域間交流』pp. 7-34
甲斐叢書刊行会編1974『甲斐叢書』
日原興忠復刊1966『甲斐国志』
関川村1992『関川村史』
八代町教育委員会1983『五里原遺跡発掘調査概報』
八代町教育委員会1987『三光神遺跡』
八代町教育委員会1989『真根子塚古墳』
八代町教育委員会1990『遺跡詳細分布調査報告書』
八代町教育委員会1996『堀ノ内遺跡』
八代町教育委員会1999『堀川遺跡』
八代町教育委員会2004『下長崎遺跡』
笛吹市教育委員会2007『五里原遺跡』
山梨県2007『山梨県史』通史編2 中世
山梨県教育委員会1964『山梨県遺跡地名表』
山梨県教育委員会1978『埋蔵文化財分布調査報告書』
山梨県教育委員会1979『山梨県遺跡地名表』
山梨県教育委員会1986『山梨県の中世城館跡分布調査報告書』
山梨県教育委員会1988『金牛遺跡1（中世編）』
山梨県教育委員会1989『下長崎遺跡 両の木神社遺跡』
山梨県教育委員会1990『身洗沢遺跡 一町五反遺跡』
山梨県教育委員会1995『山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書』
山梨県教育委員会2000『二本柳遺跡』
山梨県教育委員会2009『山梨県内中世寺院分布調査報告書』
山梨県立図書館1969『甲斐国社記・寺記』
山梨郷土研究会編1981『山梨郷土史年表』

報告書抄録

| フリガナ | シモシンベエヤシキアトイセキ | | | | | | | |
|-------------------------------------|--|-----------------------------------|-----------------------|---|--------------------|-----------------------------------|-------------|------------|
| 書名 | 下新兵衛屋敷跡遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 笛吹農業協同組合ガソリンスタンド建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 笛吹市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第25集 | | | | | | | |
| 編者者名 | 高野高潔、泉 英樹、小谷亮二 | | | | | | | |
| 編集機関 | 昭和測量株式会社 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒400-0032 山梨県甲府市中央3-11-27 電055-235-4448 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2012年3月30日 | | | | | | | |
| フリガナ 所収遺跡名 | フリガナ 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| シモシンベエヤシキアト 下新兵衛屋敷跡 イセキ 遺跡 | ヤマナシケン ツネツキノ 山梨県 笛吹市 アツシロチョウウミナキ 八代町 南 874-1・867-5 番地 | 19211 | | 35° 37′ 3″ | 138° 38′ 24″ | 2010.9.27 ～ 2010.10.22 | 77 | 商業施設 建設 |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 下新兵衛屋敷跡 遺跡 | 城館跡 | 古墳時代 奈良・平安 時代 中世 | 竪穴建物2軒 上坑（土壇墓） | 土師器・須恵器・勾玉 土師器・須恵器・ 灰釉陶器 人骨・銅銭 | | 須恵器椀瓶が出土 中世後半の女性の 人骨が出土 | | |

版 型：A4
頁 数：40頁
本文組版：16級（11P）明朝を基本
図版製版：300dpi.150線1色
図版印刷色：墨
印刷方式：オフセット印刷
用 紙：表紙 テンカラーエンボス皮しほスカイ四六判175kg
本文 マットコート紙A判44.5kg

笛吹市埋蔵文化財調査報告書 第25集

下新兵衛屋敷跡遺跡

笛吹農業協同組合ガソリンスタンド建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月30日発行

| | | |
|-------|--|--|
| 編 集 | 昭和測量株式会社 〒400-0032 山梨県甲府市中央3-11-27 | Tel. 055-235-4448 |
| 発 行 | 笛吹農業協同組合 〒406-0822 山梨県笛吹市八代町南561番地 笛吹市教育委員会 〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市南3809-1 | Tel. 055-265-1600 Tel. 055-261-3342 |
| 印刷・製本 | 株式会社ヨネキ 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-14-6 | Tel. 055-235-4311 |

Fuefuki City Archaeological Report Vol.25

The Report of
Archaeological Research of SHIMOSHINBEI-YASHIKIATO Site

An Archaeological Survey prior to the Construction of
JA-SS Gas Station

2012
JA Fuefuki
Fuefuki City Board of Education
Showa survey Co, Ltd.